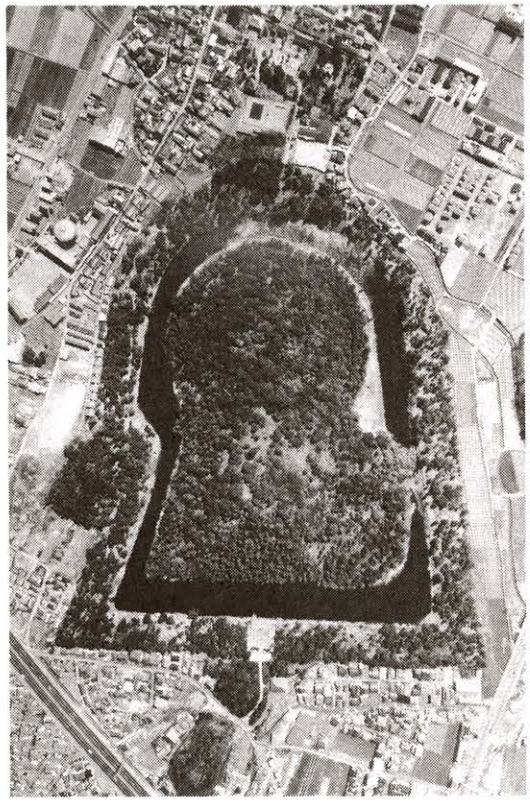
大水川改修にともなう発掘調査概要・X

応神天皇陵古墳外堤・V



1999. 3

大阪府教育委員会

はしがき

羽曳野市に所在する「応神陵古墳」は、堺市の「仁徳陵古墳」と並んで我が国屈指の大前方後円墳であることはあまりにも有名であります。

富田林市の喜志町付近で石川より分流し、北流する大水川は、応神陵古墳の外濠にそって直角に折れ曲がり東に向きを変えています。すなわち古墳の造営に際して川の流れを制御し、古墳の西側に切り替えるという大土木工事を成し遂げています。

5世紀に近畿地方を中心に行われた大型前方後円墳の造営事業は、単に大量の「盛り土」作業を実施したに留まらず、墳丘の周囲に幾重にも「築堤」し、「濠」を巡らすことを考え出しました。古代の人々の英知の結集が大々的に自然を克服しようとする歴史的な第一歩と言えるでしょう。

昭和55年度より始まった大水川改修工事に伴う発掘調査によって、我々はあまりにも多くのことを学び、また多くの課題を与えられました。本書が地域の歴史研究の資料となり、文化財へのご理解を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが長年の発掘調査に対し、ご協力とご理解を賜りました関係各機関及び地元の皆様に記して感謝いたします。

平成11年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　鹿　野　一　美

例　　言

1．本書は、羽曳野市に所在する大水川改修工事にともなう応神天皇陵外堤の発掘調査概要報告書である。

2．本調査は、大阪府土木部の依頼を受けて大阪府教育委員会事務局文化財保護課が実施した。

3．本調査は、平成10年４月15日から平成11年３月31日まで実施した。

4．本調査は、文化財保護課調査第１係技師今村道雄、橋本高明、西川寿勝を担当者として実施した。

5．本書に使用した標準値は、東京湾標準潮位値（T.P.）である。

6．本書は芝野、橋本、西川が分担、執筆した。

目　　次

本 文 目 次

はしがき
例　言
目　次

第１章　調査に至る経過（橋本）
１節　調査経緯…… 1
２節　掘削と層序…… 2

第２章　調査成果（西川）
１節　現地調査…… 3
２節　古墳時代の遺物…… 3
３節　奈良時代の遺物…… 8
４節　平安・鎌倉時代の遺物…… 12

第３章　古室遺跡内発掘調査成果（芝野）
１節　調査成果…… 13
２節　小結…… 13

第４章　まとめ（西川）…… 15

抄録…… 18

挿 図 目 次

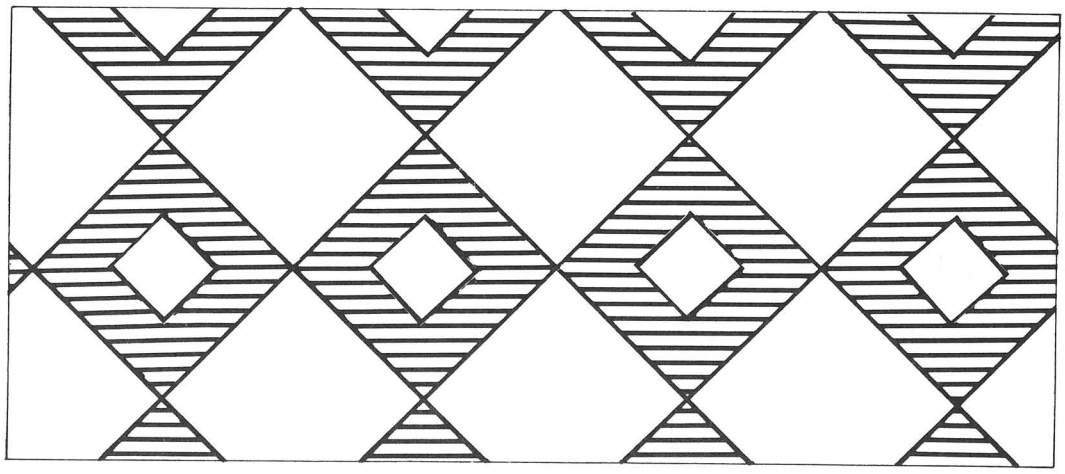
第１図　調査位置図…… 1
第２図　周辺調査位置図…… 2
第３図　土層図…… 2
第４図　古墳時代の遺物（１）…… 4
第５図　古墳時代の遺物（２）…… 5

第６図　古墳時代の遺物（３）…… 6
第７図　古墳時代の遺物（４）…… 7
第８図　土馬編年と今回出土土馬…… 9
第９図　歴史時代の遺物（１）…… 10
第10図　歴史時代の遺物（２）…… 11
第11図　歴史時代の遺物（３）…… 12
第12図　土馬…… 12
第13図　流路平面図…… 12
第14図　南西部土壙群平面図…… 14

盾形埴輪の紋様模式図（部分）…… 下
実測遺物対照表…… 17
応神天皇陵古墳外堤地区割表示図…… 18

図　版　目　次

表紙写真　応神天皇陵古墳航空写真
図版表紙　土馬
図版１　98－１・２区調査状況と土砂堆積状況
図版２　98－１・２区完掘状況
図版３　古室遺跡調査区発掘状況（１）
図版４　古室遺跡調査区発掘状況（２）
図版５　埴輪（１）
図版６　埴輪（２）
図版７　埴輪（３）
図版８　埴輪（４）
図版９　埴輪（５）
図版10　奈良時代の遺物



盾形埴輪の紋様模式図（部分）

大水川改修にともなう発掘調査概要・X

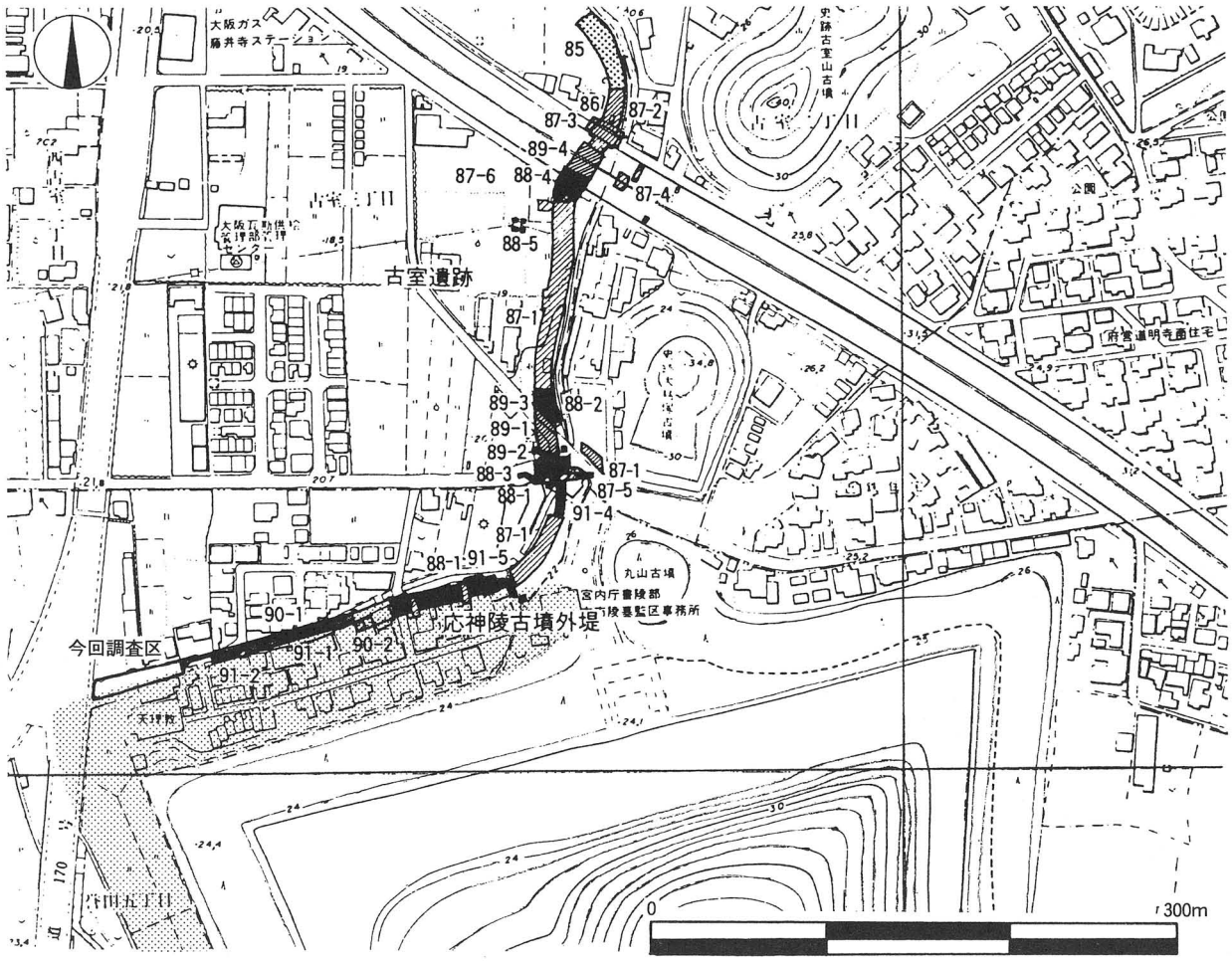
応神天皇陵古墳外堤・V

第１章　調査に至る経過

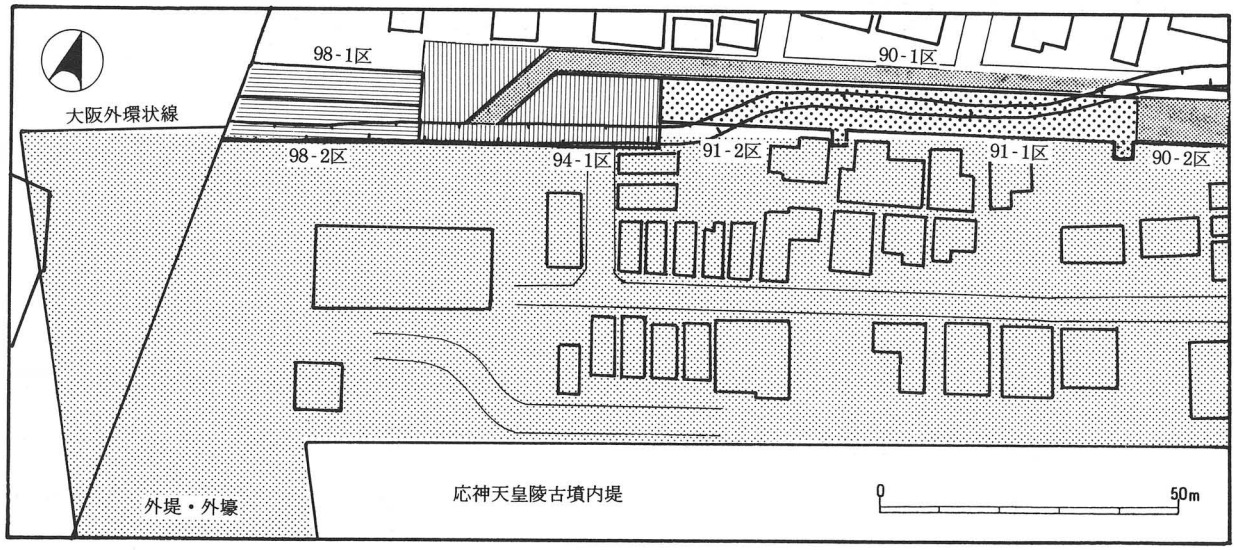
１節．調査経緯

大水川改修工事にともなう埋蔵文化財の発掘調査は、昭和55年度の試掘調査に端を発し、昭和56年度以降、応神天皇陵古墳外堤・古室遺跡・林遺跡の３遺跡の調査を断続的に行ってきた。調査概要報告も10冊をこえることとなった。刊行された概要報告と調査位置についてはシリーズⅧ（1991年刊行）に詳しい。その後、シリーズⅨ（1992年刊行）・『応神陵古墳とその周辺』――一級河川大水川改修工事にともなう発掘調査の成果－（1994年刊行）を経て本書に至る。

今回の調査地は国道170号線に接する部分で、91－２区の調査によって切り替えられた現河川及びその北側にあたる。調査面積は約200㎡、本事業にかかわる最後の調査である。



第１図　調査位置図

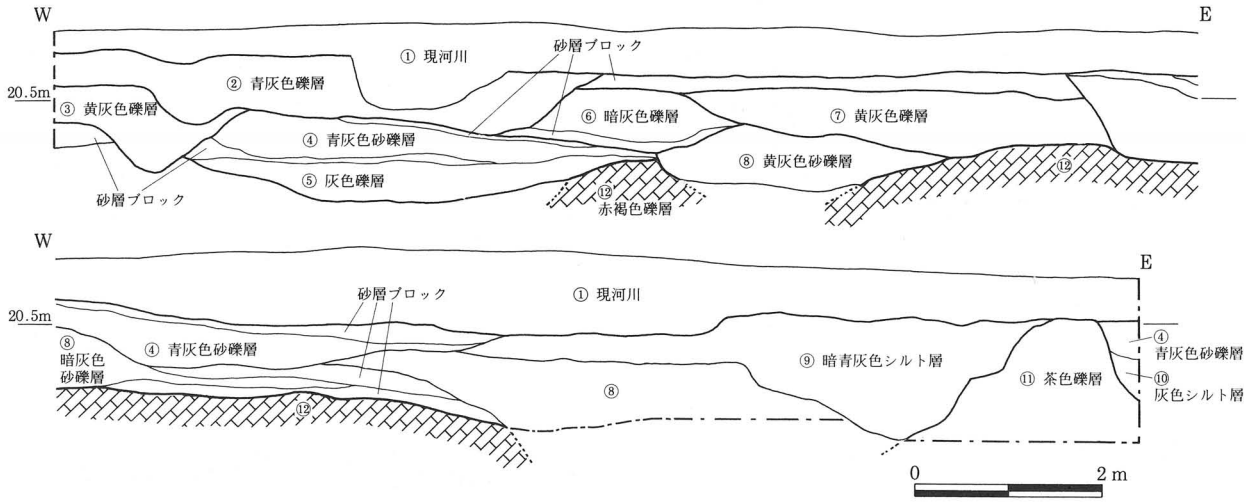


第２図　周辺調査位置図

２節. 掘削と層序

調査区は現河川の流れを確保しながら発掘調査を実施するため、調査予定地をセンターで東西方向に二分割し（北側を98－１区・南側を98－２区)、川の流れを切り替えながら行った。調査は、まず98－２区について綱矢板で土留めを行い、上層の現代堆積物を重機で除去した。上層の除去後、遺物包含層を人力にて掘削、無遺物層を確認し調査を終了した。その後、同様の方法で98－１区を調査した。

土層の堆積状況は旧河川による氾濫の繰り返しを物語る。狭小な調査区の中で平面的に流れの方向や規模を確認することはできなかった。断面から観察できる礫層及び砂礫層の堆積状況と地山（12・11層、洪積段丘礫層・その崩落土層）の起伏から河川の氾濫は②・③層、④～⑥層、⑦・⑨層、⑧層の４回が想定できる。この内、⑧層以外の堆積層には応神天皇陵古墳外堤を起源とする埴輪から中・近世の遺物までが含まれていた。ただし、⑧層には遺物が含まれなかった。



第３図　土層図

第２章　調査成果

１節．現地調査

現河川敷に設定された調査区は上流からの土砂が厚く堆積していた。土砂の堆積は氾濫による撹乱や永年の浚せつなどで現代のヘドロやゴミが深層まで混在し、堆積物の年代を層位から推定することは不可能だった。また、現河川に木杭で流路の修正を加えた痕跡以外に顕著な遺構も残っていなかった。ところが、下流の調査成果同様に土砂堆積層は多量の土器・瓦類が包含されており、二次堆積ではあるが近隣の遺構から転落、流入した遺物と考えられた。今回調査は混在して発見された遺物を時期ごとに整理し、近隣遺構との関係を解明することに主眼をおいた。

尚、本調査区は大阪府教育委員会で新たに設定した地区割表示に従って位置付けすることができる（P18参照）。応神天皇陵古墳のある羽曳野市中部はＦ６－７区画に該当する。この区画を更に300に細分した100m四方の方眼中、調査区はＥ20区画内に位置する。本来、Ｅ20区画を更に100に細分した10m四方の方眼によって発見された遺物の所属を限定している。しかし、今回の調査では遺構の性格と調査工程を検討した結果、調査予定地を南北二分して98－１区・98－２区を設定し（第２図）、遺物を取り上げることとした。

２節．古墳時代の遺物（第４～７図・図版５～９）

応神天皇陵古墳に伴う埴輪破片が大半を占める。埴輪は墳丘から転落したものではなく、西側や北側の外濠を画する堤の埴輪が転落したものである。円筒埴輪と盾形埴輪・鞆形埴輪などの形象埴輪がある。以上の埴輪は下流の調査で発見された埴輪と紋様や技法が共通する。

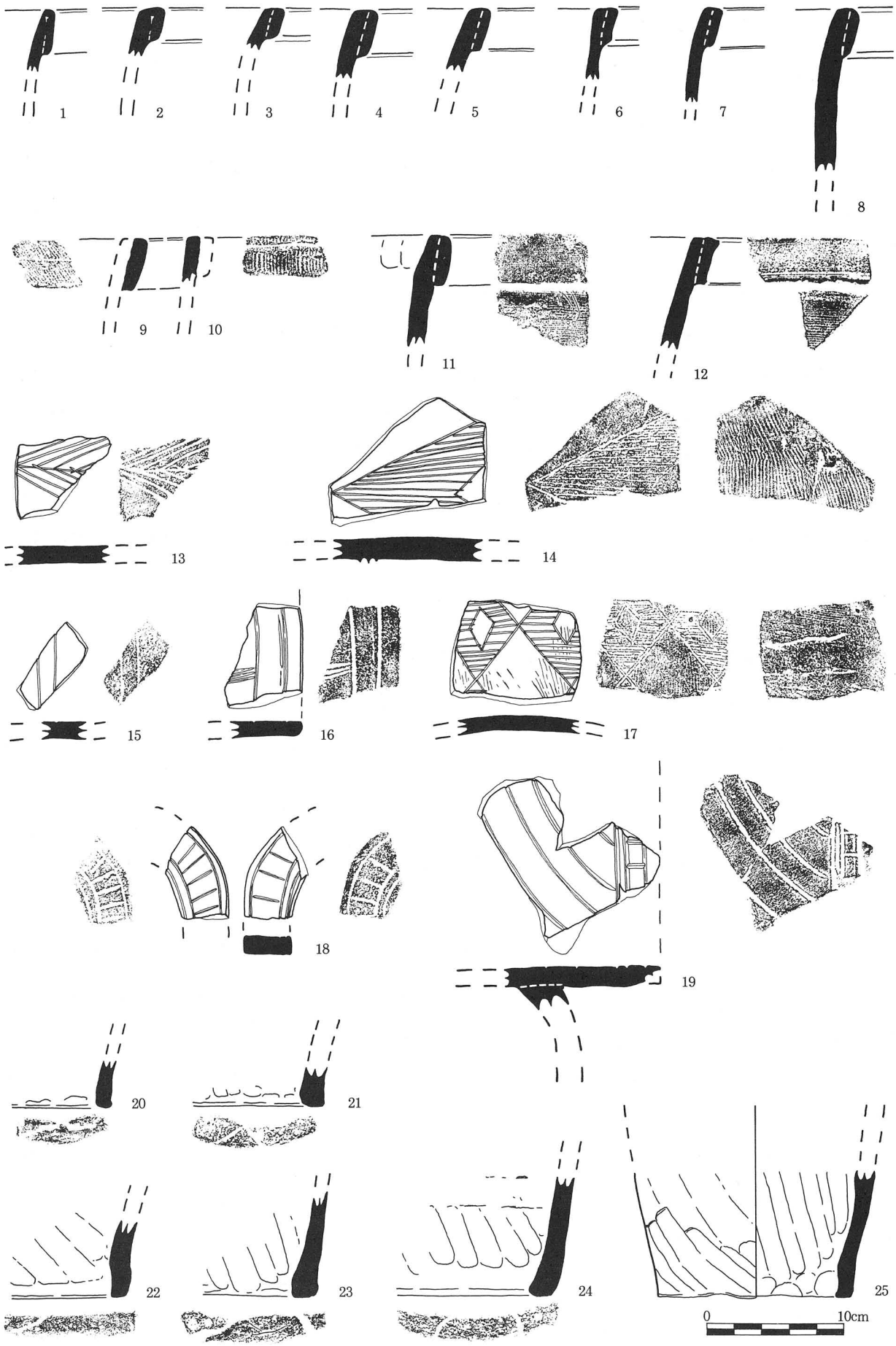
盾形埴輪は盾中央部に格子紋がある破片（第４図17）と、盾辺縁部に鋸歯紋がある破片（第４図13・14）がある。いずれも小片で内外面を粗い刷毛目で調整した後、紋様を線刻する。鋸歯の内側を綾杉形の線刻で充塡する鋸歯紋と鋸歯の内側を平行線で充塡する鋸歯紋がある。

鞆形埴輪はヒレ部と円筒部の接合部破片（第４図19）と、ひも状飾りの破片（第４図18）がある。いずれも小片で内外面を粗い刷毛目で調整した後、紋様を線刻する。接合部破片は須恵質、暗茶褐色で硬く焼き締り、外面はわずかに朱が付着する。

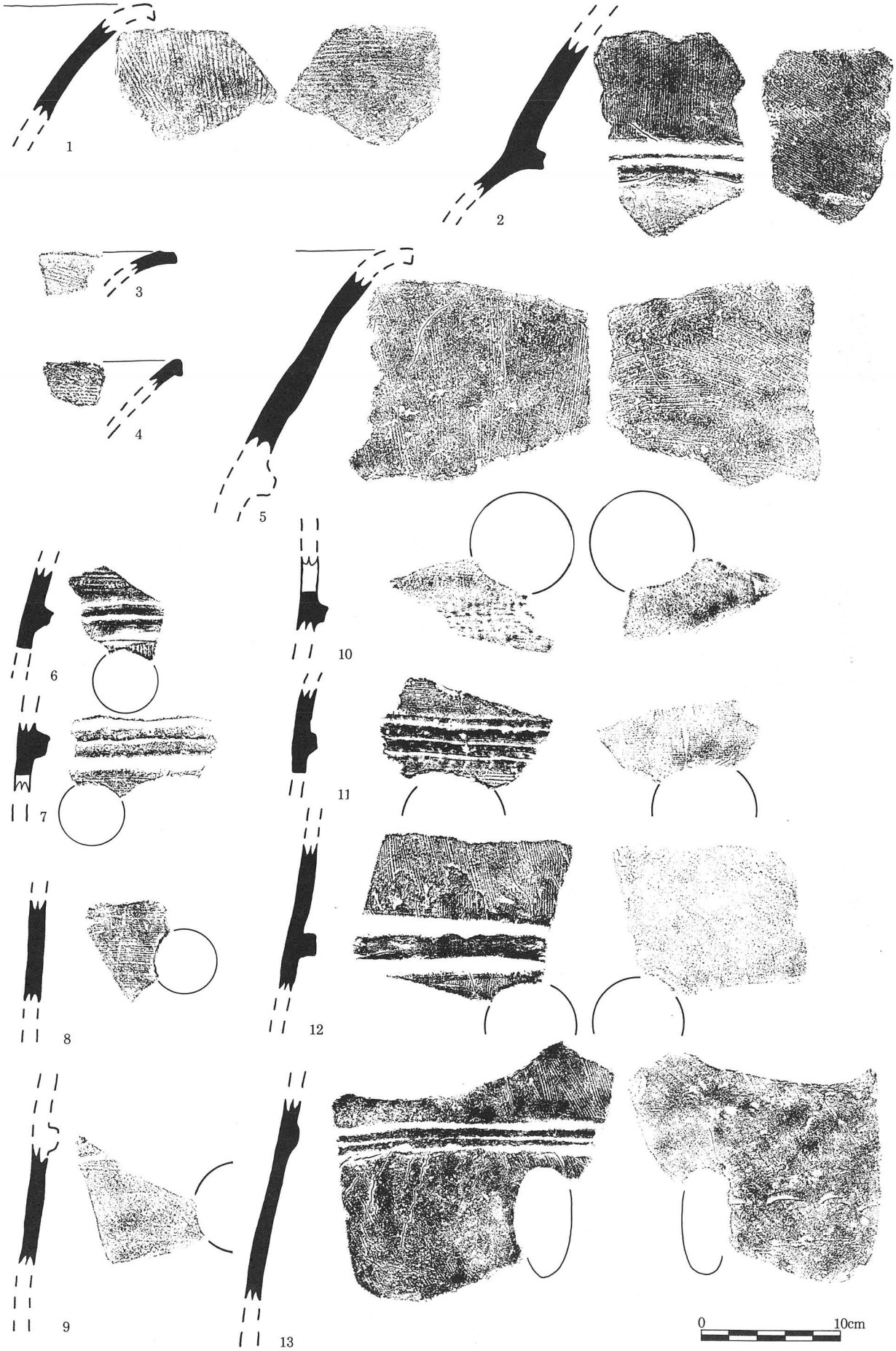
その他、形象埴輪の断片がいくつか発見された。いずれも粗い刷毛目で調整した後、平行線などの紋様を線刻する。（第４図15・16）

円筒埴輪は口縁端部を二重にし、ほぼ直立する普通円筒と、口縁部をラッパ状に外反させる朝顔形円筒がある。いずれも小破片であるため、形態の違いは口縁部のみしかわからない。他に、最大径が20㎝未満の小型円筒埴輪がある。近隣の小古墳から流れ込んだものだろう。

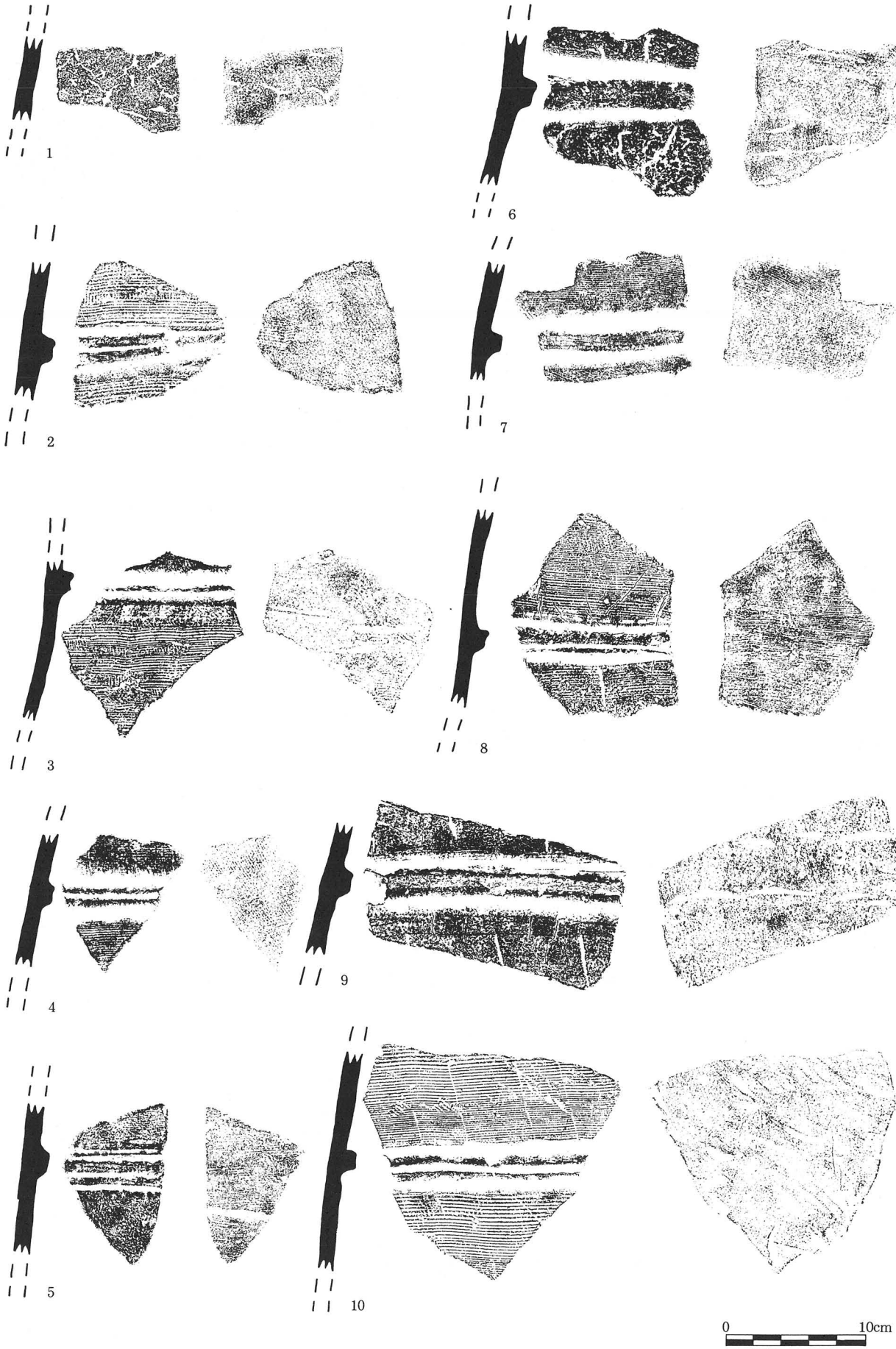
普通円筒の口縁端部は茶褐色で硬質のもの、赤褐色で軟質のものがある。上端は幅３㎝程度の粘土帯を貼りつけて二重にしたもの（第４図３～12）と、端部を折り返して二重にしたものがある（第４図１．２）。外側に貼りつけた帯のうち接合面がみえる部分には粗いハケ目で表面を凸



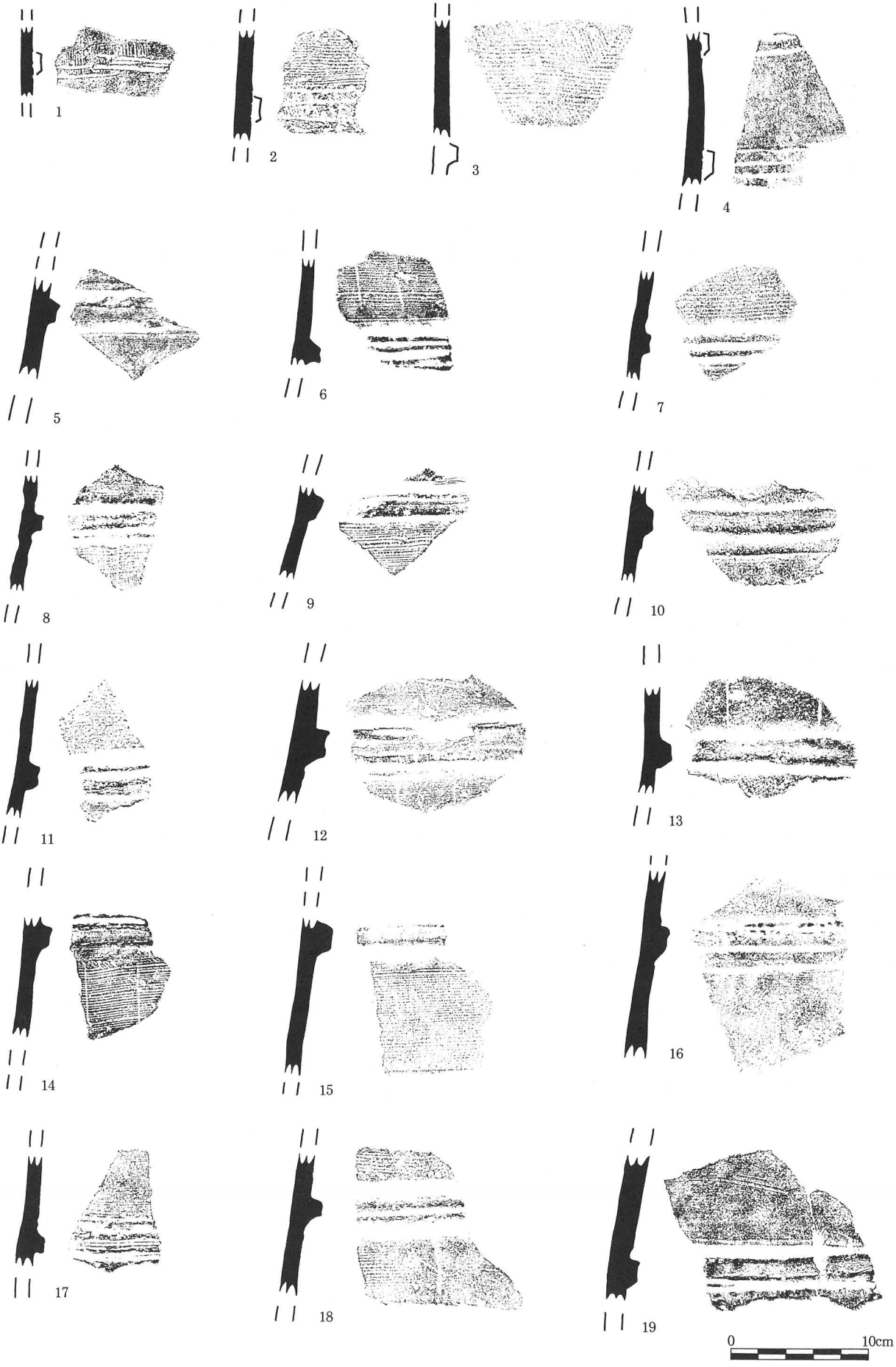
第４図　古墳時代の遺物（１）



第５図　古墳時代の遺物（２）



第６図　古墳時代の遺物（３）



第７図　古墳時代の遺物（４）

凹にしたあとがある（第4図9．10)。口縁端部はいずれも粗い横ナデでやや丸く仕上げる。破片はすべて小さく、口径を復元できるものはなかった。

朝顔形円筒の口縁部は黄褐色の軟質のもののみ発見された（第5図1～5)。上端は横ナデにより滑らかに仕上げ、外反する部分の外面は縦に、内面は斜めに粗いハケ目を施す。その下には突帯があり、突帯下方が急激にしぼむ。いずれも口径は不詳である。

円筒埴輪の胴部は茶褐色で硬質のもの、青灰色で特に焼きが硬く須恵質のもの、赤褐色で軟質のものがある。外面調整はストロークが6～8㎝程度、静止痕が斜めに傾く横ハケが目立つ。横ハケをナデ消した部分もある。底部、あるいは口縁部に近い部分だろうか。内面は斜めハケで調整したあとを残すもの、そのあとを粗くナデ消したものがある。ナデ消した指の跡が明瞭に残る部分もある。ごく少量であるが無調整と考える破片もある（第6図1・6)。無調整の部分は粘土を板状に形成する際の細かいしわが残されており、いくつもの板状粘土を型枠のようなもので形成し、それを積み上げて量産した痕跡かもしれない。細かいしわは型枠に粘土を押し込んだ時の隙間のように見える。ただ、このような痕跡を残す無調整の埴輪片は少なく、特殊な技法なのか、ほとんどの部分でナデ消されているのか明確にできない。あるいは底部を板状工具で押さえた時についたものかもしれない。

円筒埴輪の突帯は約1㎝幅の粘土紐を貼りつけて形成される。突帯の上下は丁寧にナデられ、粘土紐は四角く仕上げられる。粘土紐を接合する部分は斜め、あるいは縦のハケ目によって接合部分の凹凸を激しくしている。このハケ目は単に横ハケ前の器壁調整と考えるより、接合をよくするため部分的に入念になされたようだ。これは口縁端部に残る接合痕と共通する。

円筒埴輪の透かし穴は直径5㎝弱の円形のものがみられる（第5図6～12)。

円筒埴輪底部は茶褐色で硬質のものと赤褐色で軟質のものがある（第4図20～25)。概して軟質のものが多い。これは焼成時の火回り位置が悪かったことによるのだろう。外面・内面とも斜めハケを残す部分、ナデ仕上げをする部分がある。横ハケや板状工具のあとはない。端部は平らに仕上げるものの無調整か調整後に傷ついた部位が多い。また、棒状の台をかませたとおもわれる部分は所々へこむ。へこみは指程度の太さしかなく、運搬の台と考えるよりむしろ、乾燥をよくするためと考えたい。

円筒埴輪には口径20㎝以下の小型がある（第4図25・第5図13)。この埴輪は胎土や焼成も他の円筒埴輪と峻別できる。角がとがる砂粒・くさり礫を多く含み、焼きが甘い。透かし穴は楕円形で、突帯は低く波打つ。円筒埴輪編年の末期に位置づけできる。これらの埴輪がどこから流出したのかは今のところ不明である。

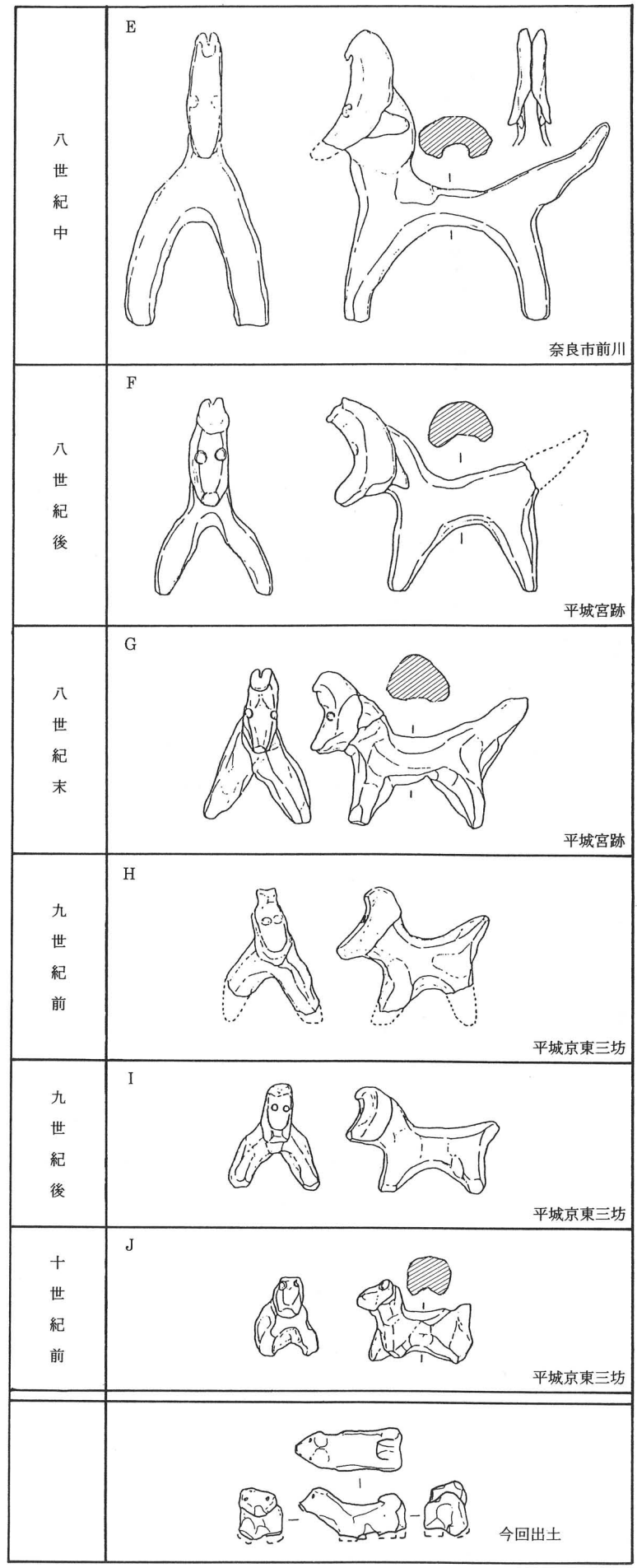
3節　奈良時代の遺物（第8・9・11・12図・図版10)

土師器・須恵器・瓦・土製品がある。これらは古墳時代の遺物や近・現代の遺物に混ざり発見された。流出の起源は同じではないだろう。本節では遺物の性格上、集落にかかわる遺物、祭祀

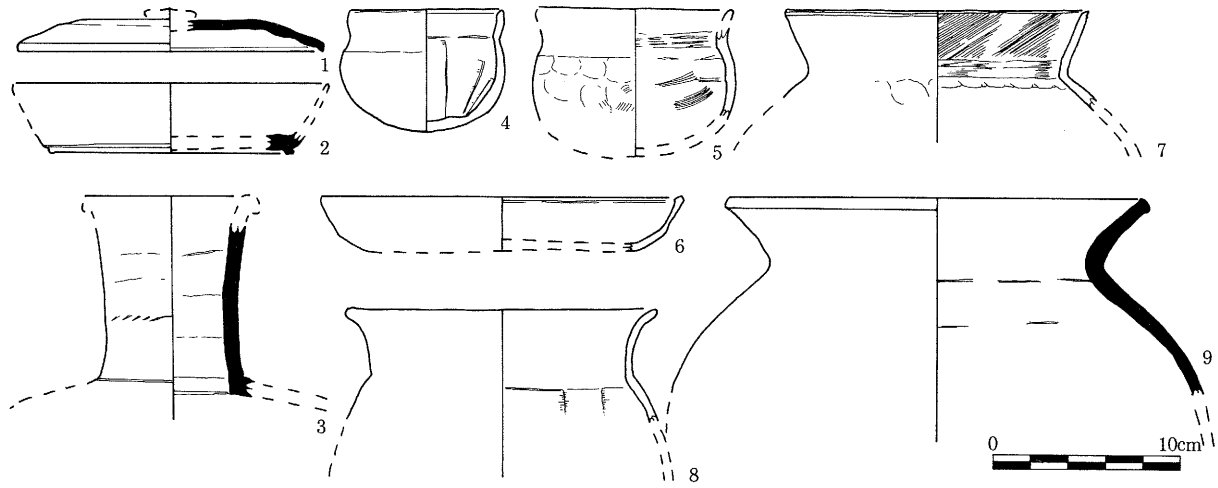
にかかわる遺物、建物部材にかかわる瓦磚類に分類する。

集落にかかわる遺物には蓋坏・壺などの須恵器（第９図１～３・９）と皿・甕などの土師器（第９図６～８）がある。須恵器蓋は灰白色、焼きが甘く扁平である。同様の色調、焼成を示す坏身も、高台が低く立ち上がりがきつく屈曲する。土師器甕は頸部のくびれが浅く、口縁端部は厚く、粗い。以上の土器は奈良時代末頃に位置づけられる。

祭祀にかかわる遺物は完形の土馬・土師器小壺である（第12図・第９図４）。土馬は小型・簡素化し四足、尻尾、頭部を明瞭にしない。体長4.9㎝、高さ2.3㎝、幅2.0㎝を測る。四足、尻尾は短く形成され、削り出したのか、つまみ出したのかわからない。頭部は貼りつけたものではなく、つまみ出し、馬面にはならず幅広に表現される。耳の表現は省略され、ひくい突起で示されている。瞳は刺突による。口元と前足の一部を欠損する。打ち欠かれたものかもしれない。以上の特徴は土馬の消長のなかで末期に編年づけられたものと一致する（第８図下）。すなわち、平城京東三坊大路側溝SD650Ｂ出土の土馬を示標とする型式である。この溝は同一場所に掘られた時期が前後する溝で当初の



第８図　土馬編年と今回出土土馬



第９図　歴史時代の遺物（１）(1/4)

ものがSD650Ａ、この溝が埋没後に掘り直したものがSD650Ｂである。両溝から土馬と紀年資料が発見されている。SD650Ａは（A.D.828）を示す木簡が、SD650Ｂ最下層からは寛平大寶（A.D.890初鋳）が、上層からは延喜通寶（A.D.907初鋳）が発見されている。以上からSD650Ｂ出土土馬、しいては末期の土馬の製作時期を平安時代前期（10Ｃ頃）と位置づけしている。

平城京東三坊大路側溝SD650ではＡ溝・Ｂ溝とも土馬が発見され型式差があった。これまでの大水川流路内発掘調査でも土馬や祭祀にかかわる遺物がいくつか発見されている。発見された遺物から祭祀は奈良時代から連綿と続いた可能性が高く、今回発見された遺物も同じ時期の祭祀遺物ではない。また、土師器小壺は奈良時代にさかのぼる。

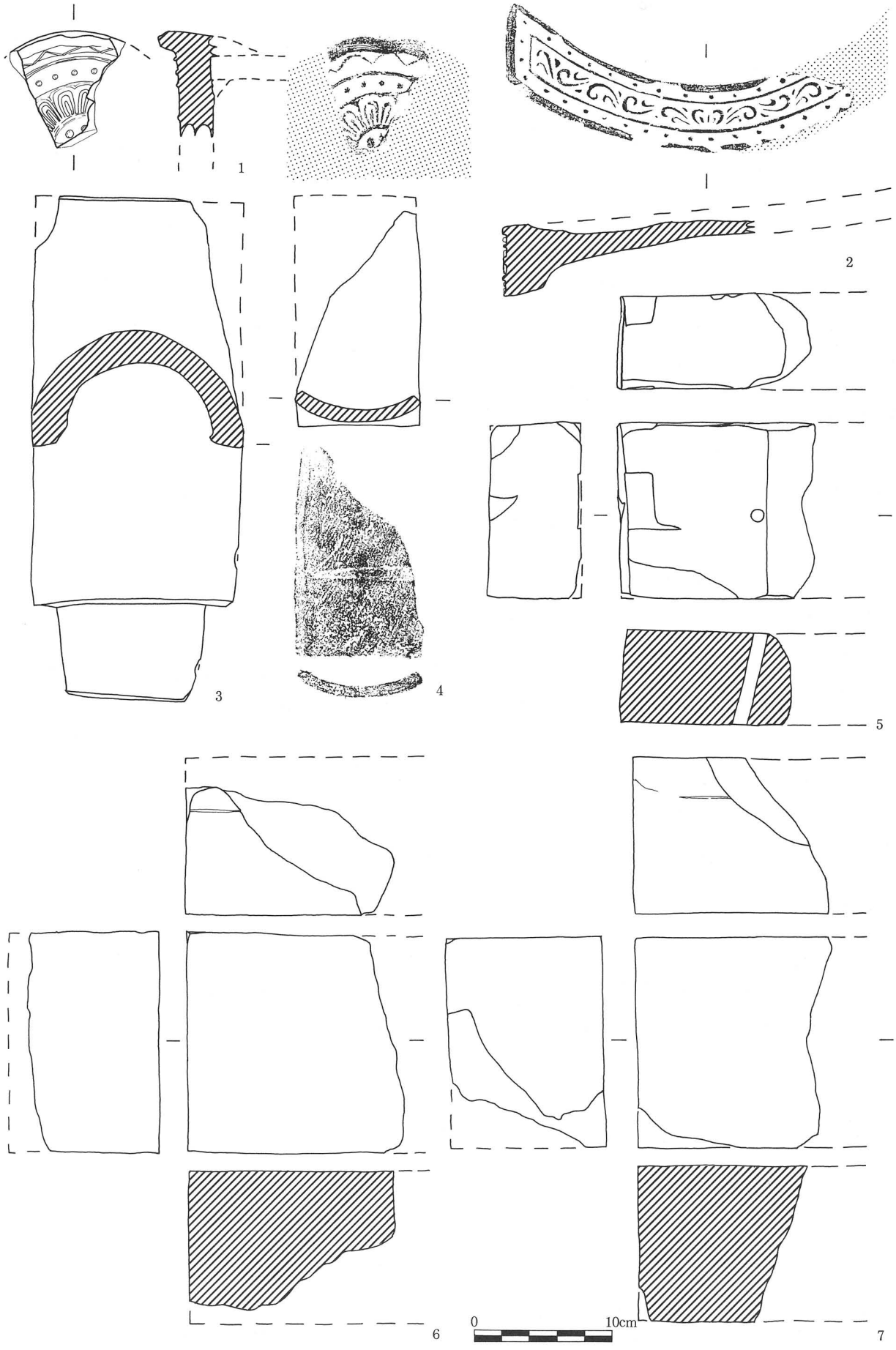
その他に瓦磚類がある。これまでの調査でも瓦磚類の出土量が最も多く、今回調査でも例外ではなかった。発見された遺物には軒瓦・丸、平瓦・磚がある。熨斗瓦と推測する道具瓦もある。

軒丸瓦はこれまでの調査でも50点以上発見されている平城6282系型式と紋様が共通する（第10図１）。この型式は内区の７葉の間弁のひとつが欠損したもので、すべて同じ笵によってつくられたことがわかっている。今回発見品は全形がわからない。

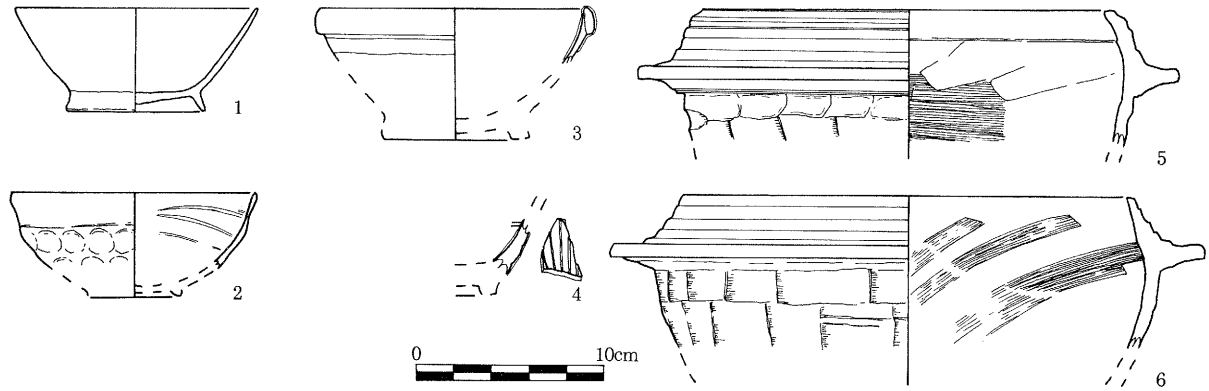
軒平瓦もこれまでの調査で20点近く発見されている平城6721系型式と共通する（第10図２）。両者は同じ建物の軒瓦として組み合うものと考えられる。

丸・平瓦は大きく作りも丁寧で、平瓦は凸面に縄目たたき、凹面に布目が明瞭に残る破片が多く、部分的に粗くなで消した破片もある。丸瓦の玉縁部分は粘土帯を貼りつけ、肩部を形成したものがいくつか確認できた（第10図３）。

丸、平瓦は他の遺物に比べ大きな破片が多く、摩滅のわずかなものも多く見られた。これまでの調査でも流域斜面を利用した瓦窯があるのではないかと想定されている。確かに瓦には粘土板の接合部で壊れた破片もあり、同じ型式の軒瓦が多数見つかるなど示唆的である。しかし、窯跡出土遺物に特徴的に見られる焼け損じた瓦、溶着した瓦、ひずんだ瓦はまったく発見されない。むしろ、使用期間が短かった大型建物があり、廃絶後瓦磚類が投棄されたのではないだろうか。



第10図　歴史時代の遺物（２）(1/4)



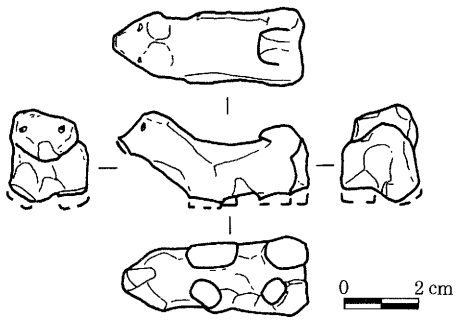
第11図　歴史時代の遺物（３）(1/4)

大型建物の存在を裏付ける遺物に磚がある。発見された磚は一部の面のみ、摩滅や欠損が激しい。見つかった磚は中央に穿孔された6.6×12.8×15＋α㎝の形（第10図５）、穿孔のない11.4×16.0×16＋α㎝の形（第10図６・７）の二種類ある。

その他の瓦に、長辺が16㎝以上、幅が９㎝、厚さ0.8㎝を測る小型品がある（第10図４）。一方の長辺は割りとるための見当線があり、その線に沿って割られている。割り熨斗瓦と思われる。

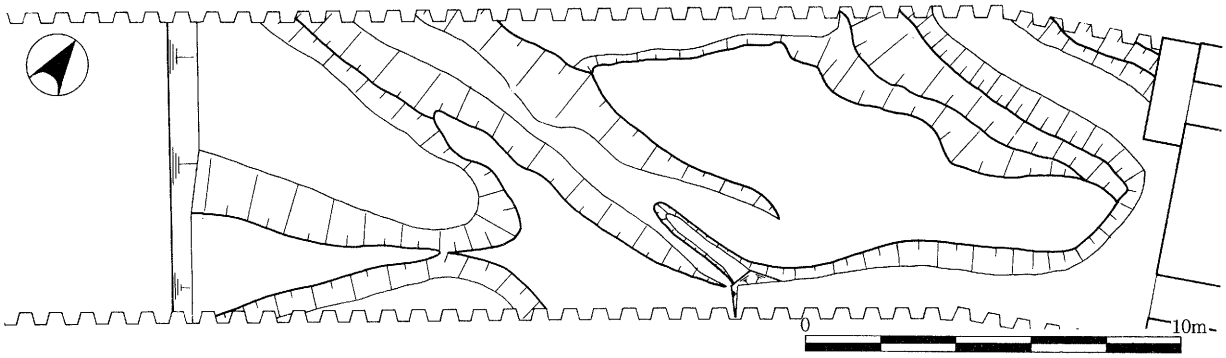
４節　平安・鎌倉時代の遺物（第11図）

発見された遺物中、わずかに平安・鎌倉時代の遺物が見られた。遺物は平安時代後期の黒色土器（第11図１）・鎌倉時代の瓦器碗・瓦質羽釜（第11図２・５・６）と青磁・白磁片がある（第11図３・４）。いずれも流水による摩滅がひどく、細部の調整は明確でない。



第８図は「土馬考」小笠原　好彦『物質文化』25　1975に加筆

第12図　土馬（1/2）



第13図　流路平面図（1/200）

第３章　古室遺跡内発掘調査成果

１節　調査成果

この調査（Ｓ60調査区）は大水川河川改修事業にともない昭和60年度に実施されたもので、今年度調査区（Ｈ９調査区）の北東約150m下流に位置する。前述したＨ９調査区の調査成果では遺構と地山の状況が良好に確認できなかったが、Ｓ60調査区ではその一端を確認しているため、改めて概要報告する。

本調査地の東側に現河川が南北に流れ、幅約15m調査区の西には分譲住宅地が続く（図版３－１）。南は西名阪道路の側溝で区切られている。現地表面は標高約20m前後でほぼ平坦である。東への地形は古室山古墳に向かって急激に上昇し、後円部墳頂は標高38mである。この段丘崖は応神天皇陵古墳の西側に南北に走る断層線につながるラインと考えられていて、本調査区の最終段階で青灰色粘土の地山に黒色の粘土層が確認され、断層による不連続線と考えられた。

標準的な層位は、表土および盛土を20～30㎝除去すると、近世以前の耕作土と考えられる黄褐色土が約50㎝堆積しており、地山は段丘礫層の褐色礫土が見られる。

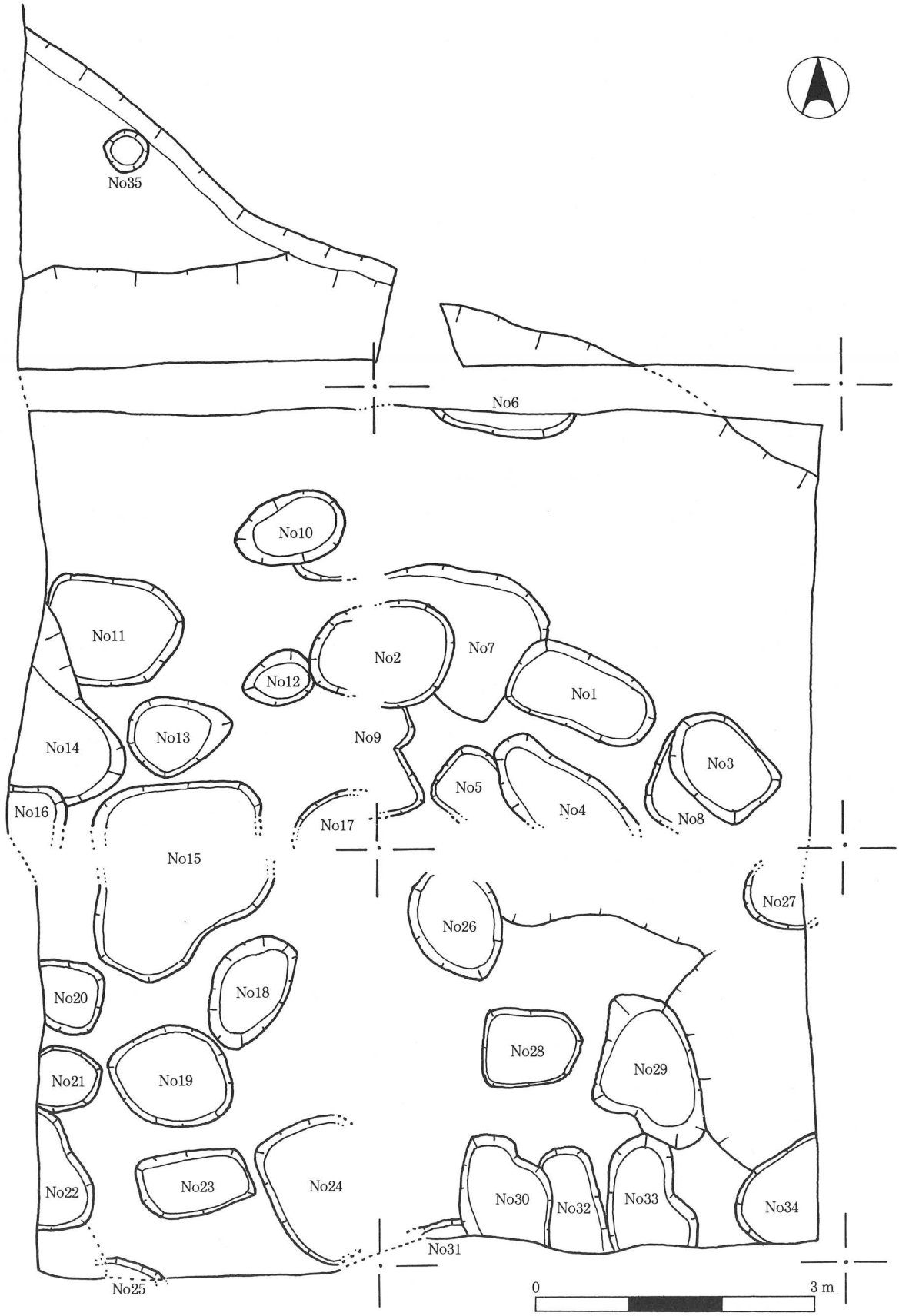
調査区の東側で旧河川が該当する部分では、河川堆積物と考えられる青灰黒色砂礫土層が約50㎝、灰褐色砂礫土層が40㎝、灰色砂礫土層が約50㎝堆積している。旧河川は幅約９m以上（復元幅約12m）、延長47m以上であった（図版４－２）。

調査区の南側で東西8.5m、南北約10mにわたり、暗紫灰色粘土層の浅い埋没谷が確認され、そこに弥生時代後期から古墳時代及び平安時代の土器とともに土壙群が認められた。O.P.＋18.5mの紫黒色土上面から検出され、黒灰褐色粘土を埋め土とする長径約１～1.5m、短径約0.5～1.1mの楕円形の土壙が検出された（第14図・図版４－１）。

下層は灰黒色粘土の地山面に竪穴住居跡の可能性が考えられる隅丸方形の浅い土坑が認められた。さらに、その地山面からはサヌカイト剝片が出土している。

２節　小結

この調査地点では、東側で大水川の旧河道が検出され、南側に浅い埋没谷が確認された。それらの消長は前者が多量の瓦・埴輪を含み、古市古墳群を貫流するものであり、その最後が室町期にあたると推測され、後者は旧石器時代から存在し、弥生時代後期から古墳時代、及び平安時代に土壙群を形成する形で利用されていたことが判明した。



第14図　南西部土壙群平面図

第4章　まとめ

昭和56年度から本格的に実施された大水川改修に伴う発掘調査は今年度の調査まで、多くの成果を蓄積することができた。その詳細については10冊以上にのぼる調査概要報告などで検討されている。これらによっていままで不明瞭だった応神天皇陵古墳の築造時期や外表施設に関する研究が飛躍的に進展した。

まず、円筒埴輪によって位置づけられる古市古墳群での大型古墳築造順序のうち、応神天皇陵古墳を明快に位置づけできる基準資料を提供した。すなわち、津堂城山古墳を皮切りに始まった土木工事ラッシュはとぎれることなく、仲津姫陵古墳、墓山古墳と続き、応神天皇陵古墳で最大規模となり、允恭天皇陵古墳、仲哀天皇陵古墳、仁賢天皇陵古墳、安閑天皇陵古墳と規模を縮小してゆく。円筒埴輪の編年は上記の古墳出土埴輪を軸に近年発掘資料の増加した中小古墳についても年代的位置付けを可能にさせた。ただ、前方後円墳を築造するとき、もっとも外側に位置する外堤の完成が超大型である応神天皇陵古墳の場合、構築開始からどれくらいの期間を経るのか留意すべき問題だった。しかし、これまでに発見された埴輪を観察するかぎり、その前後の時期に構築された大型古墳との時間的な重なりや隔たりはほとんどなく、造営事業が思ったより、短期間・集約的に成し遂げられたと考えられるようになった。

そして、円筒埴輪や木製品と並んで発見された盾形・靫形・衣笠形・馬形・家形など各種の形象埴輪や人物埴輪から外堤には様々な装飾がなされていたこともわかった。蛇足ながら、『古事記』には応神天皇陵古墳の馬形埴輪が駿馬となって夜道を走ったという伝説がある。大水川で発見された形象埴輪はこの記述を彷彿させる資料でもある。

期待されていた笠形木製品の年輪年代測定結果はもっとも外側の年輪が西暦302年、削られた外側部分の年輪幅が意外に大きいことがわかった。

さて、大水川は国府の台地西部を南北に貫流している。流路は誉田断層と呼ばれる活断層に沿っている。活断層以前の堆積は約20000年以上前と推定されており、この堆積層を南北4㎞にわたり、約6ｍずらす形で変位・変形させている。そして、応神天皇陵古墳が造営された5世紀以降の複数の地震によって古墳自体も変形したと考えられている。大水川改修に伴う調査でもこの基盤堆積層となる大阪層群の急傾斜が確認され、断層の位置や実態にに迫る資料を得ている。

応神天皇陵古墳の造営によって、大水川は墓域の西外側に切り替えられる。また、古墳周溝に蓄えられた水も大水川に取りつく水路によって調節され、大水川は周辺集落の生活排水や農業潅漑用水として新たな役目を担う。大型古墳の堤をきる水路は允恭天皇陵古墳・仲哀天皇陵古墳などでも発見されており、その目的や時期について、資料の増加が期待されている。

堆積した土砂には古墳時代後期以降、奈良・平安時代の土器など生活雑器が含まれていた。特に、奈良時代の瓦が大量に投棄されていたことは周辺の土地利用を考える上で示唆的である。大水川から発見された奈良時代の瓦は軒瓦の紋様が平城宮第二次朝堂院や国分寺などに利用された

ものと同じ系譜であることが知られている。しかも、軒丸瓦は50点以上の6282系型式が、軒平瓦は20点以上の6721系型式が発見されており、その他の型式はほとんどない。強いセット関係をもって、これらの軒瓦が投棄されていたことは瓦が寄せ集められたり、永きにわたって転用され続けたものではないことが伺える。つまり、遺跡の付近に公的色彩が強い建物が複数存在したと考える方向、または、付近に瓦窯があり、生産にともなう遺物が投棄されたと考える方向である。前者は、調査区の南に広がる挟山遺跡から郡衙にかかわる建物などの遺構が発見されていることより、関連する施設が周辺にもあったと予想できる。また、発見された多くの磚も重要な建物など、施設に伴う部材として評価できる。

一方、後者では瓦の供給先として、周辺寺院から発見された6282系軒丸瓦から流通の実態を伺うことができる。すなわち、船橋廃寺・河内国分寺跡・青谷廃寺・西琳寺跡・野中満願寺など、周辺の主要古代寺院からこの軒丸瓦が発見されることにより、近くに生産地を推定することができるとするものだ。ただし、今回調査では焼けひずんだ瓦や生焼けの瓦など、明らかな失敗品は見つかっておらず、窯に伴う遺物の流出とは考えにくい。仮に瓦窯があったとすれば、大水川を運搬のルートとして利用し、川原に集積されていた瓦が何かの理由で廃棄されたか、洪水で押し流されたと考えることはできないだろうか。

建物にせよ、瓦窯にせよ、奈良時代の後半頃、宮都造営や国家事業にかかわる瓦工人に関係するものが短期間存在し、廃絶したことが伺える。大水川周辺は該当時期に重要な地域であったことが確認できる。

次に、古室遺跡では弥生～古墳時代と平安時代後期頃の多数の土壙が営まれたことがわかった。検出された土壙だけでも100基に及び、未調査地域や流路で破壊された部分の土壙を合わせると350基以上の土壙群があったと推定されている。これらの土壙は該当時期の庶民の墓という説がある。ほとんど副葬品をもつことなく、地上に印を残さなかったのか、狭い地域に切り合って営まれる。古室遺跡で発見された土壙群は土壙の形態変化によって、伸展葬から座位屈葬に切り替わることが指摘されている。

その他、流路内から発見された人面墨書土器や土馬などの祭祀遺物は奈良～平安時代の人々の信仰の一端を知る手がかりとなる。川原に沿って営まれた土壙群とあわせ、当時の大水川の景観を考える上で興味深い。

実測番号	器種・時期	挿図番号	図版番号	実測番号	器種・時期	挿図番号	図版番号
1	小壺　奈良末	9－4	10上1	49	朝顔形埴輪	5－2	7上6
2	小壺　奈良末	9－5	10中3	50	朝顔形埴輪	5－5	7上5
3	皿　奈良末	9－6	10中7	51	円筒埴輪体部	5－13	9上5
4	甕　奈良末	9－8	10中5	52	円筒埴輪体部	6－3	8上4
5	甕　奈良末	9－7	10中4	53	円筒埴輪体部	6－8	8下5
6	長頸壺　奈良末	9－3	10中9	54	円筒埴輪体部	7－9	9上2
7	杯蓋　奈良末	9－1	10中6	55	円筒埴輪体部	7－5	
8	杯身　奈良末	9－2	10中8	56	円筒埴輪体部	7－12	9上6
9	壺　奈良末	9－9	10中10	57	円筒埴輪体部	6－4	9上3
10	土馬　奈良末	8・12	10上2	58	円筒埴輪体部	6－9	7下5
11	碗　平安	10－1		59	円筒埴輪体部	5－12	9上7
12	碗　鎌倉	10－2		60	円筒埴輪体部	7－18	
13	碗　鎌倉	10－3		61	円筒埴輪体部	7－13	8上3
14	碗？　鎌倉	10－4		62	円筒埴輪体部	6－6	9下3
15	羽釜　鎌倉	10－6		63	円筒埴輪体部	6－1	9下4
16	羽釜　鎌倉	10－5		64	円筒埴輪体部	6－10	8上5
17	円筒埴輪底部	4－25	6下6	65	円筒埴輪体部	7－15	7下4
18	円筒埴輪底部	4－24	6下7	66	円筒埴輪体部	5－11	8下3
19	円筒埴輪底部	4－21	6下4	67	円筒埴輪体部	5－6	
20	円筒埴輪底部	4－22	6下1	68	円筒埴輪体部	6－7	8下2
21	円筒埴輪底部	4－20	6下2	69	円筒埴輪体部	7－19	8下1
22	円筒埴輪底部	4－23	6下5	70	円筒埴輪体部	7－17	8下4
23	円筒埴輪底部		6下3	71	円筒埴輪体部	7－11	7下3
24	朝顔形埴輪	5－4	7上1	72	円筒埴輪体部	6－2	
25	朝顔形埴輪	5－3	7上2	73	円筒埴輪体部	7－14	8上2
26	円筒埴輪体部	7－10	7下1	74	円筒埴輪体部	6－5	8上1
27	円筒埴輪体部	5－1	7上4	75	円筒埴輪体部	7－6	7下2
28	盾形埴輪	4－17	5－1	76	円筒埴輪体部	7－8	9上5
29	盾形埴輪	4－13	5－4	77	円筒埴輪体部	7－7	
30	盾形埴輪	4－14	5－2	78	円筒埴輪体部	7－3	
31	形象埴輪	4－16	5－6	79	円筒埴輪体部	5－8	
32	形象埴輪	4－15	5－5	80	円筒埴輪体部		9上4
33	靱形埴輪	4－18	5－3	81	円筒埴輪体部	7－16	
34	靱形埴輪	4－19	5－7	82	円筒埴輪体部	5－10	
35	円筒埴輪口縁部	4－12		83	円筒埴輪体部	5－9	
36	円筒埴輪口縁部	4－5	6上1	84	円筒埴輪体部		
37	円筒埴輪口縁部	4－6	6上5	85	のし瓦　奈良末	11－4	
38	円筒埴輪口縁部	4－11	6上9	86	軒丸瓦　奈良末	11－1	10下11
39	円筒埴輪口縁部	4－7	6上3	87	丸瓦　奈良末	11－3	10下13
40	円筒埴輪口縁部	4－3		88	軒平瓦　奈良亜	11－2	10下12
41	円筒埴輪口縁部		6上6	89	磚　奈良末		
42	円筒埴輪口縁部	4－2		90	磚　奈良末	11－6	
43	円筒埴輪口縁部	4－4	6上2	91	磚　奈良末	11－5	
44	円筒埴輪口縁部		6上4	92	磚　奈良末	11－7	
45	円筒埴輪口縁部	4－8	6上10	93	円筒埴輪体部	7－1	9下1
46	円筒埴輪口縁部	4－1		94	円筒埴輪体部	7－4	
47	円筒埴輪口縁部	4－9	6上8	95	円筒埴輪体部	7－2	9下2
48	円筒埴輪口縁部	4－10	6上7	96	円筒埴輪体部	5－7	9上1

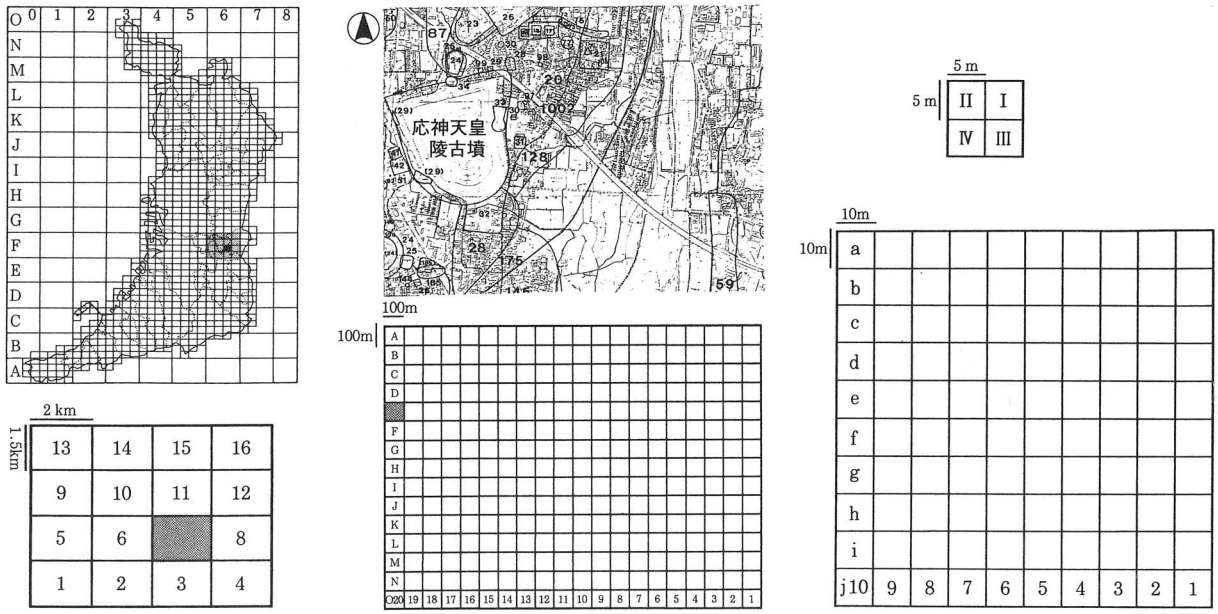
実測遺物対照表

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおずいがわかいしゅうにともなうはっくつちょうさがいよう・X
書名	大水川改修にともなう発掘調査概要・X
副書名	応神天皇陵古墳外堤・V
巻次	X
シリーズ名	応神天皇陵古墳外堤
シリーズ番号	V
編著者名	芝野圭之助・橋本高明・西川寿勝
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所在地	〒540－0008 大阪市中央区大手前２丁目　☎06(6941)0351
発行年月日	1999年３月31日

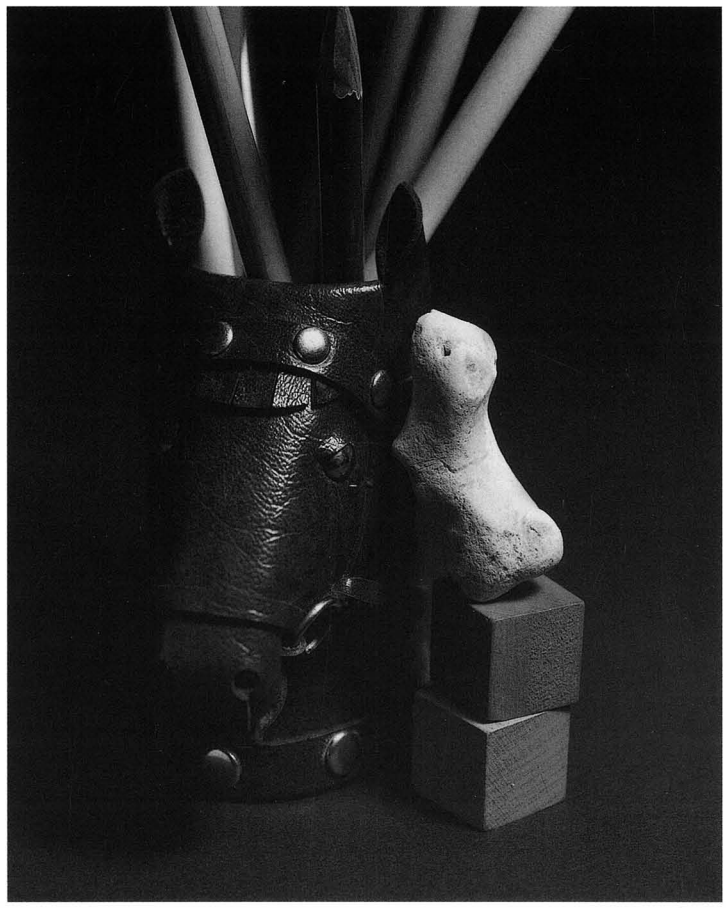
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
おうじんてんのうりょう 応神天皇陵 こふんがいてい 古墳外堤	はびきのしごんだ 羽曳野市誉田 ごちょうめ 5丁目	27222		34° 33′ 45″	135° 36′ 40″	1998年４月15日 ～ 1999年３月31日	200m²	大水川改修事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
応神天皇陵 古墳外堤	古墳	古墳時代 奈良時代 平安～ 鎌倉時代		埴輪 軒瓦・土馬 黒色土器・瓦器	



応神天皇陵古墳外堤地区割表示図

図　　版



図版1

1. 1区調査状況（東から）

2. 2区調査状況（西から）

3. 1区土砂堆積状況

4. 同上

図版2

1. 1区完掘状況（東から）

2. 同上

3. 2区完掘状況（西から）

4. 同上

図版3

1. S60調査区　調査前状況(南から)

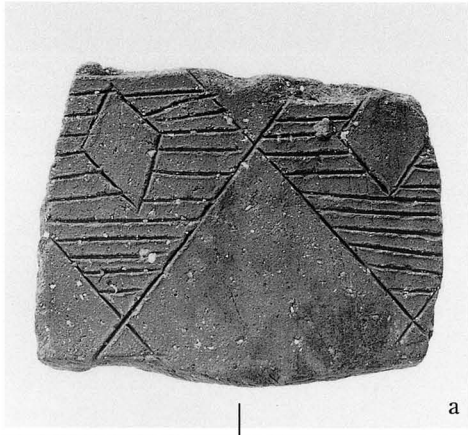
2. S60調査区　旧河川掘削状況(南から)

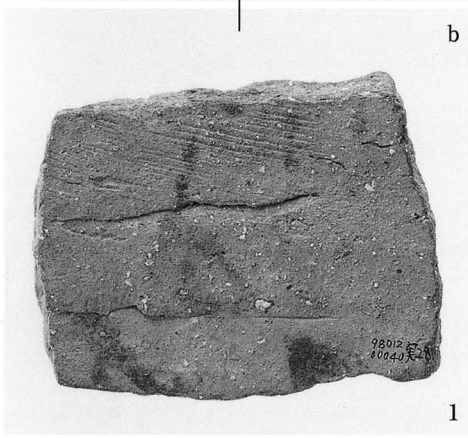
図版4

1. S60調査区　土拡群掘削状況(南から)

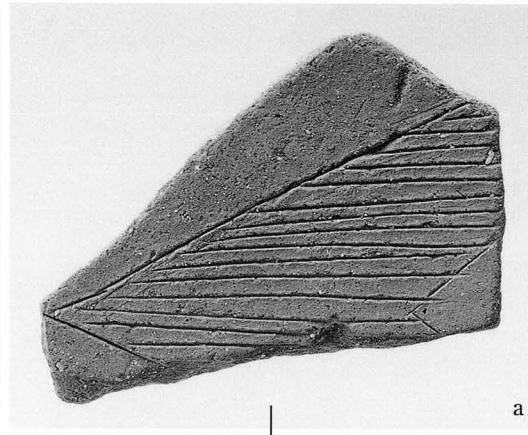
2. S60調査区　旧河道検出状況(北から)

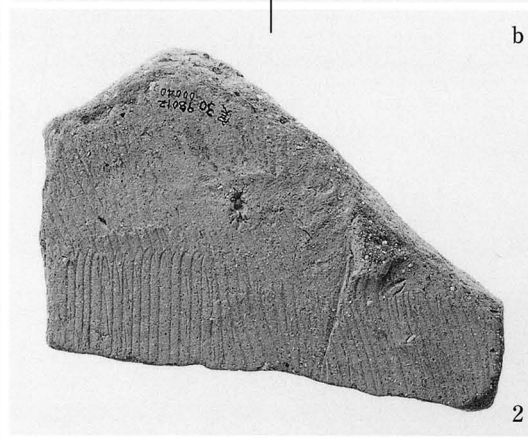
図版5　埴輪（1）

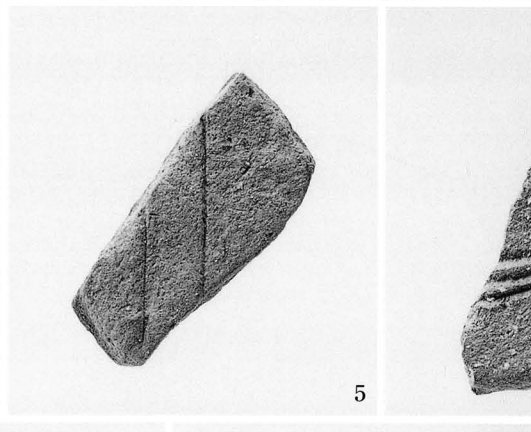

a


b

1


a


b

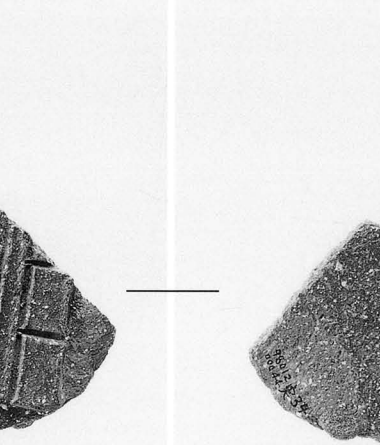

2

a

b

3

4


5

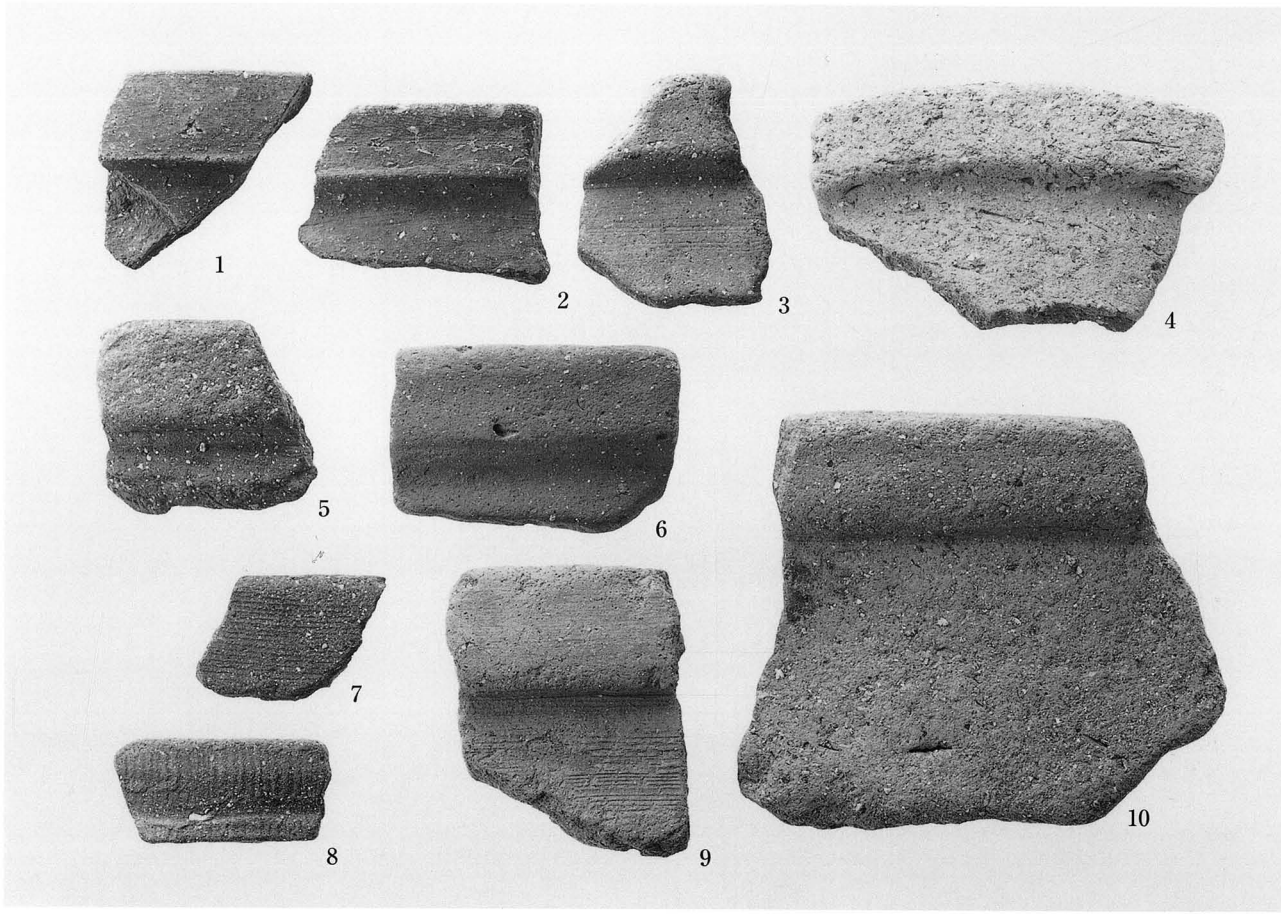
6

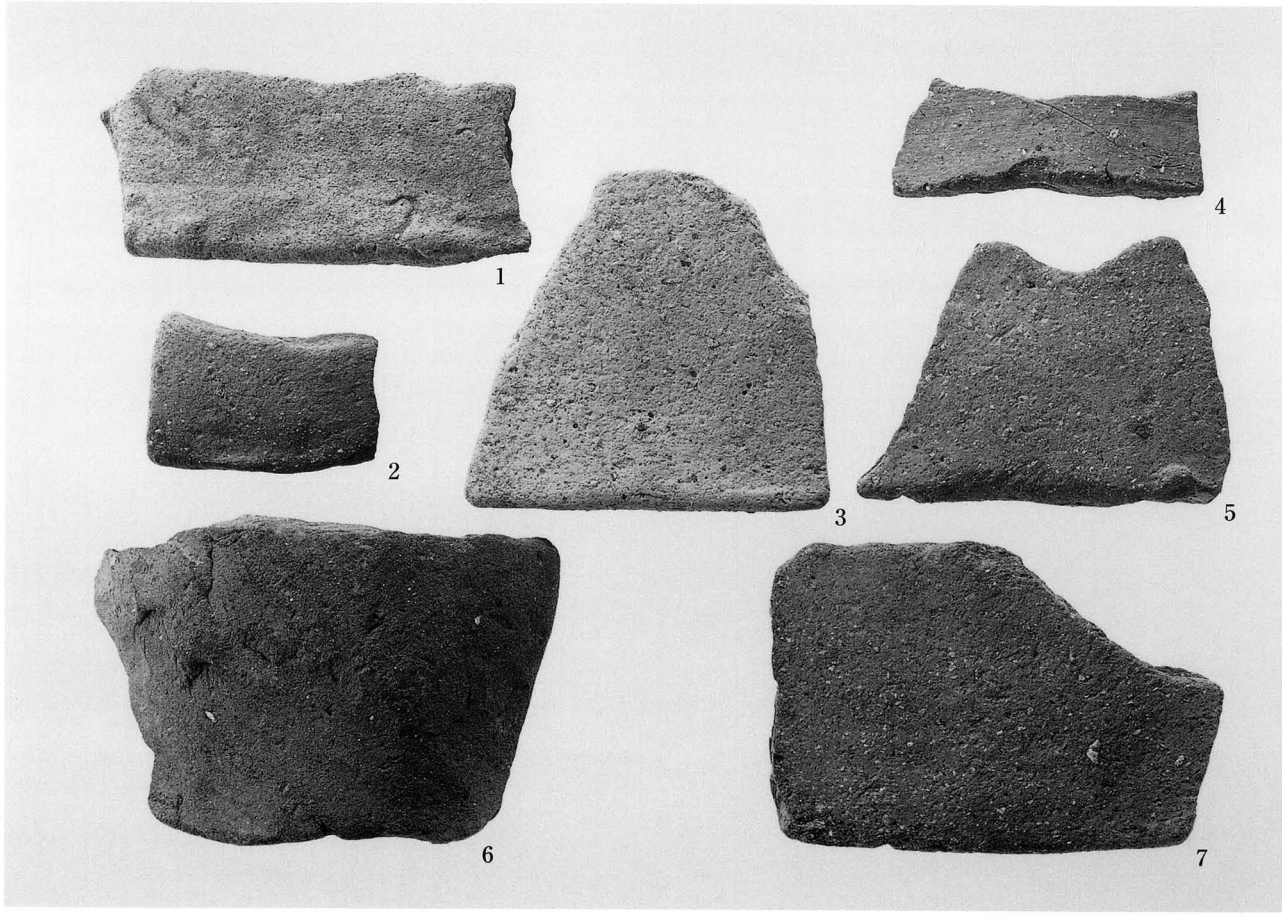
a

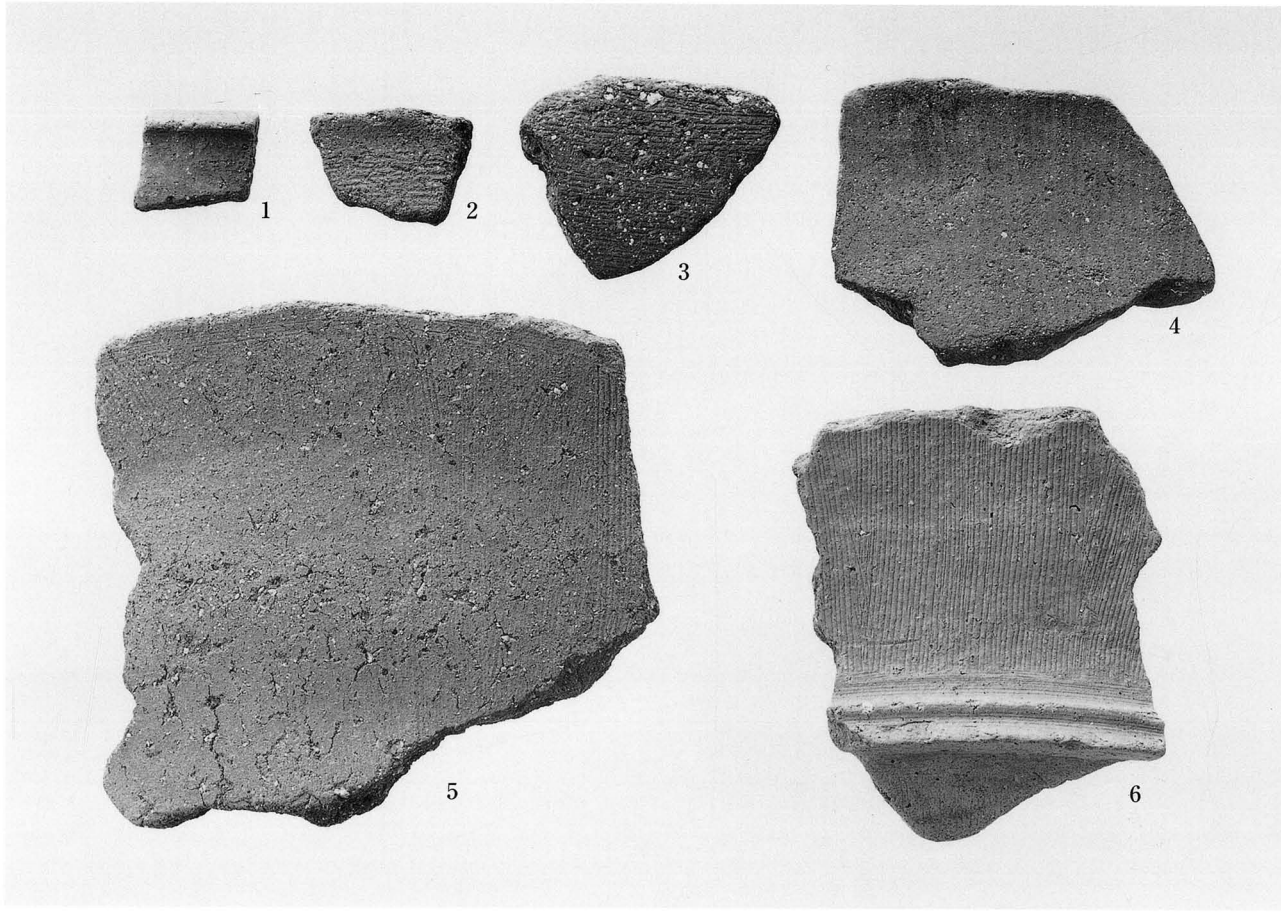
b

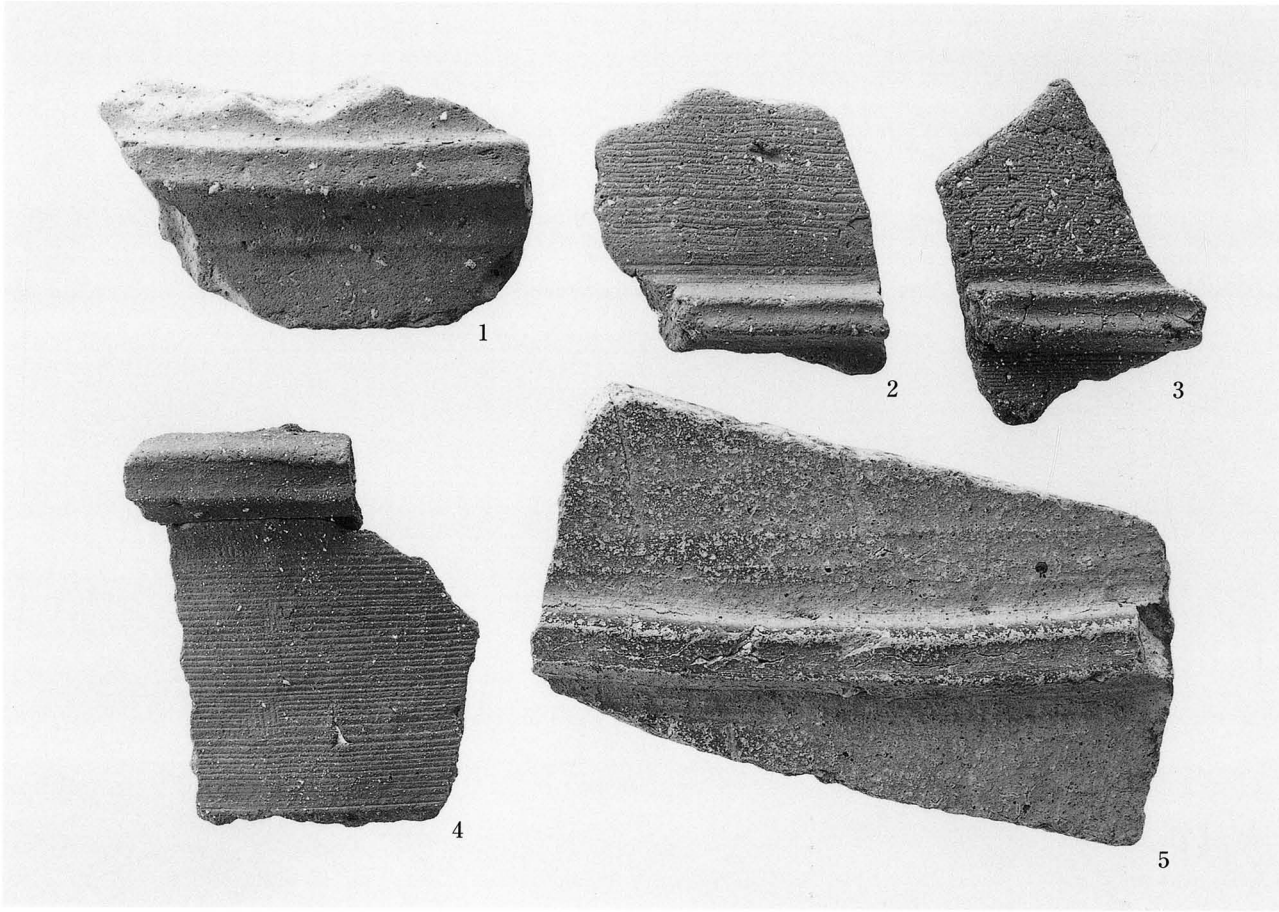
7

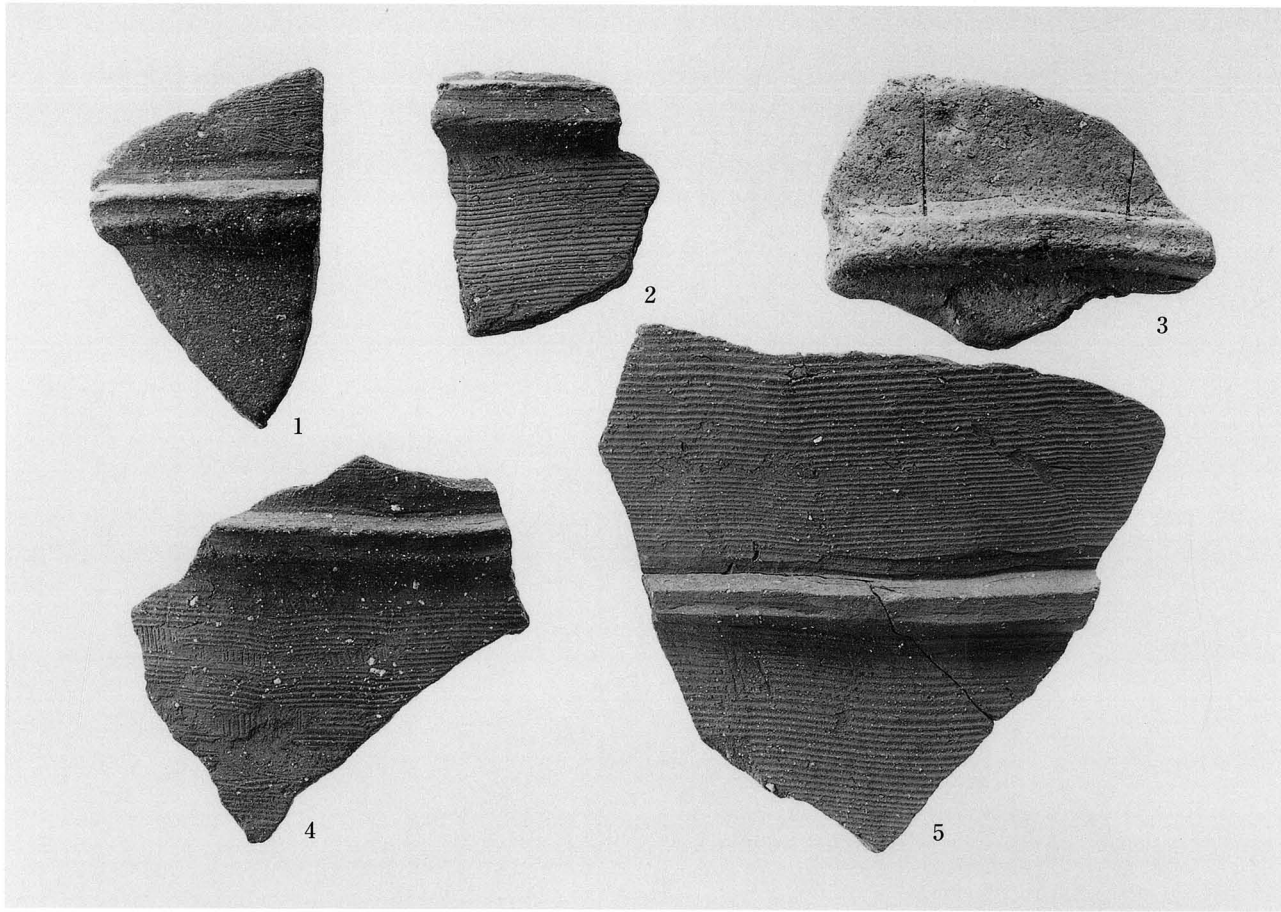
図版6　埴輪(2)

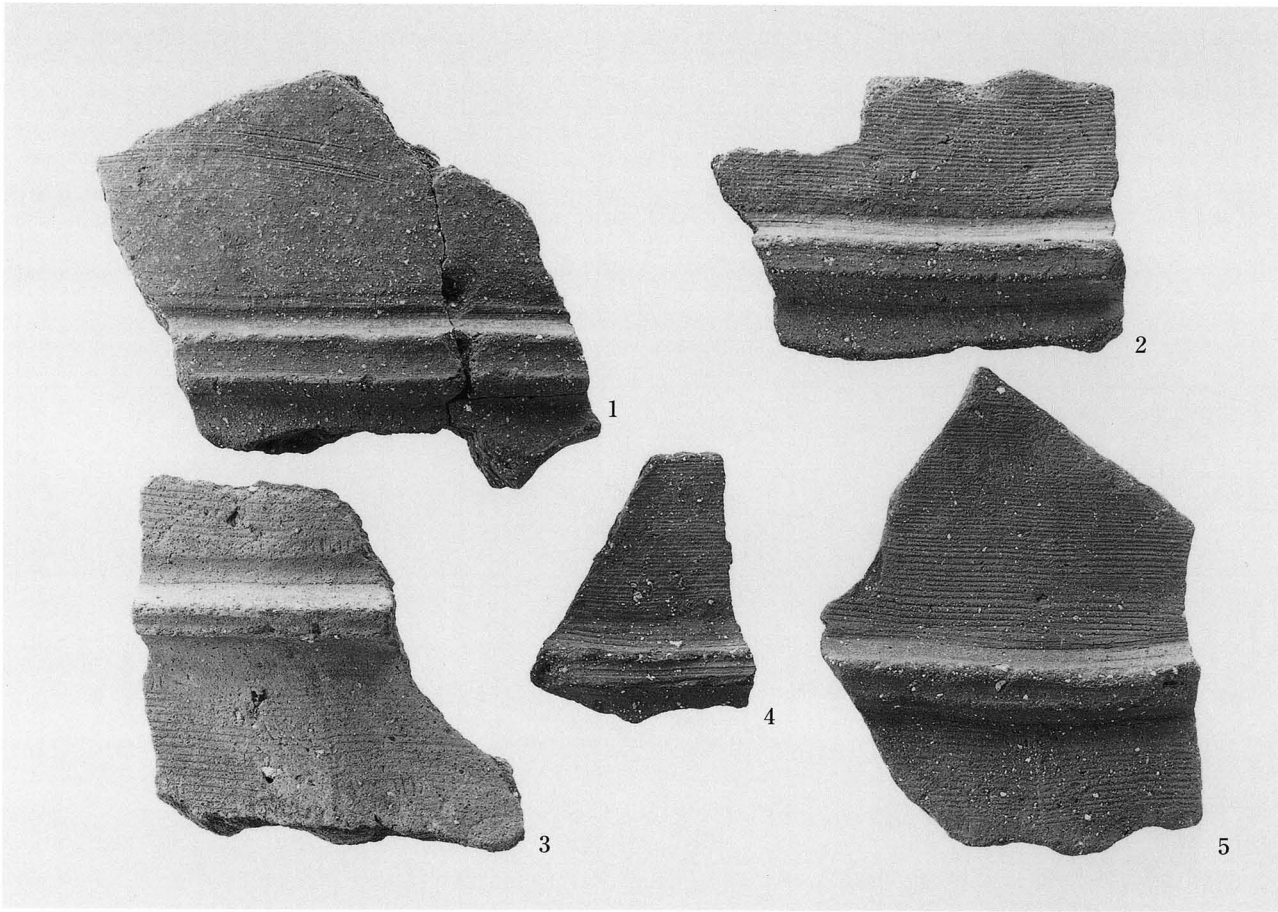


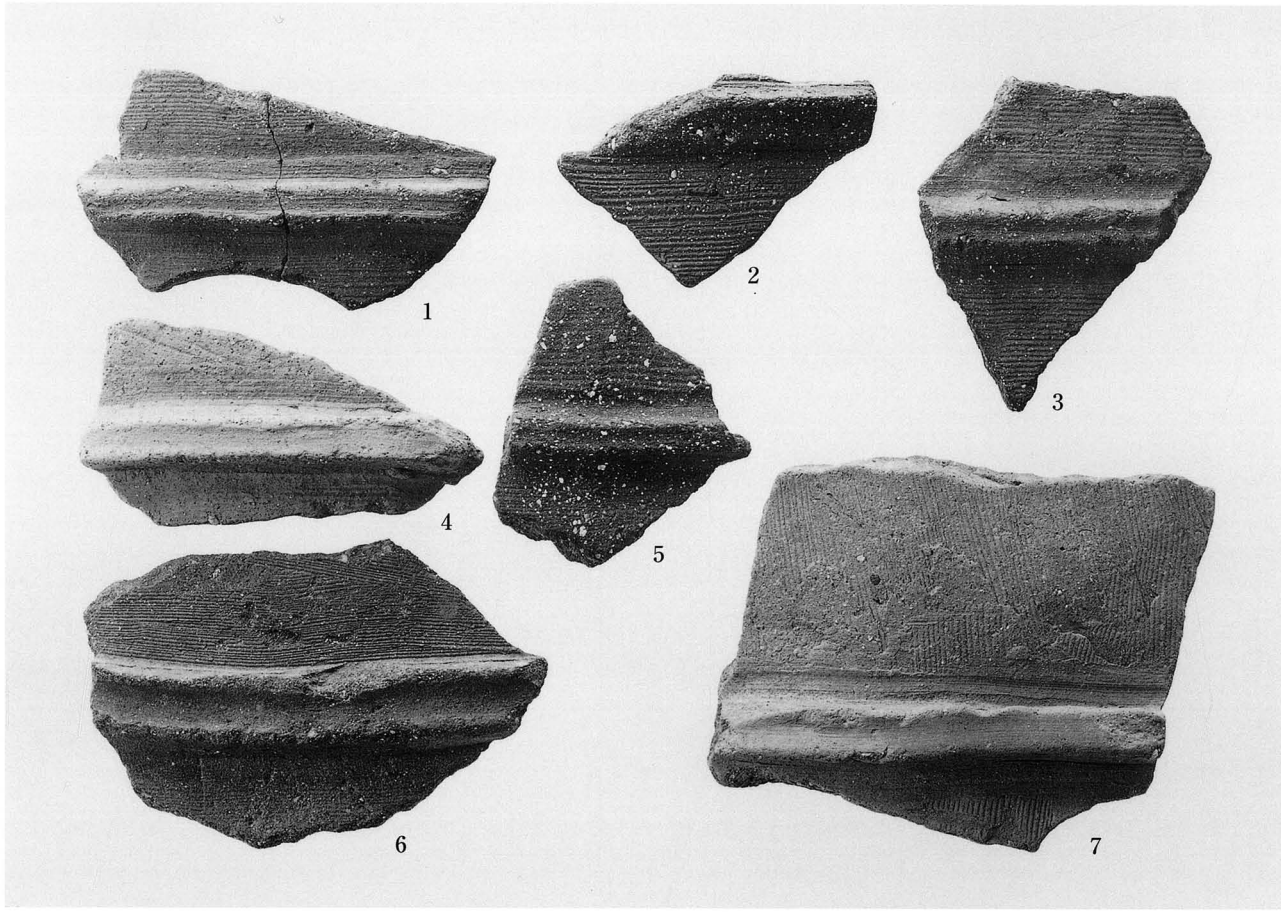



1
2
3
4
5
6


1
2
3
4
5

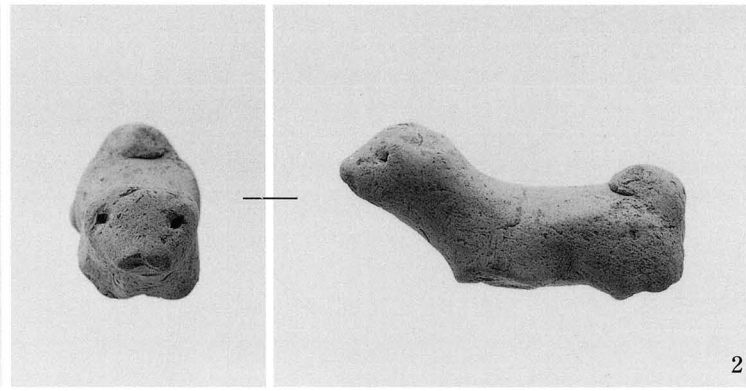

1
2
3
4
5

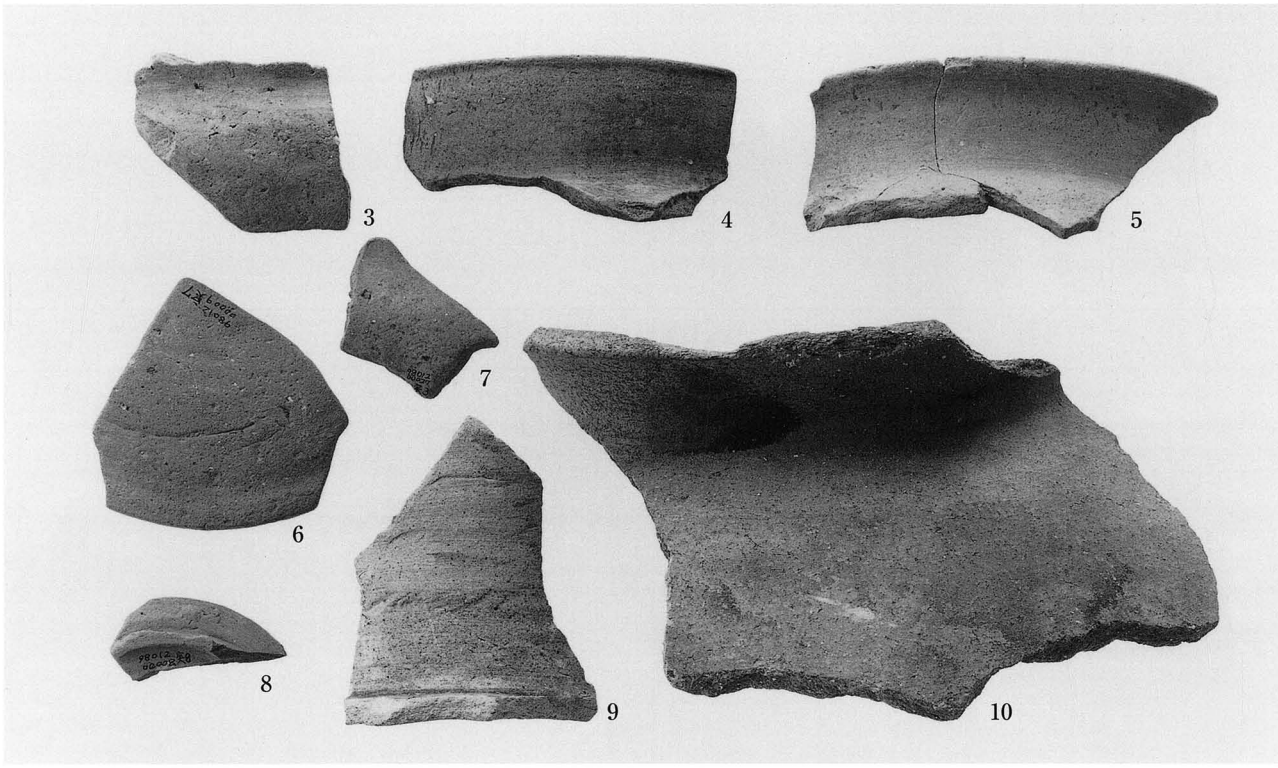

1
2
3
4
5


1
2
3
4
5
6
7

1a
1b
2a
2b
3
4
5

1


2


3

4

5

6

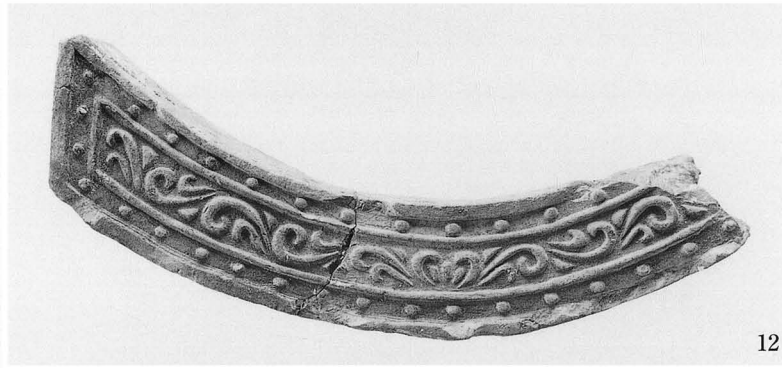
7

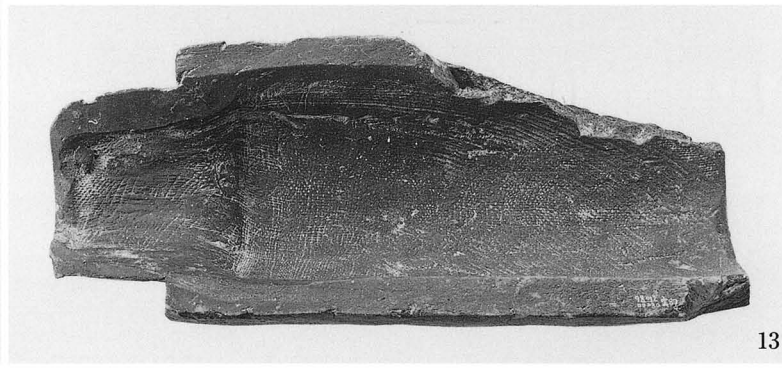
8

9

10

11


12


13